シラーの『芸術家』(1789年)における「若返りしイオーニアーの精華」

Die „verjüngten Blüthen Joniens“ in Schillers „Künstlern“ (1789)

高 橋 克 己
TAKAHASHI, Katsumi

(人間基礎論コース)
(*Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät*)

SUMMARIUM

『芸術家』におけるシラーのルネサンス理解の限界と、その思想が本来意味する歴史事実を明らかにするのが本論の趣旨である。まず野蛮人と彼はイスラムを片付けるが、実際ルネサンスの先駆となるスコラ哲学に影響を与えた源が他ならぬイスラムである。また彼が東方よりの美しき亡命者と呼んでいる人々を詳しく調べてみると、彼らはシラーが考えたビューザンティオン陥落の1453年以後ではなく、それよりも前の1439年の公会議に際して西欧入りしている事実が重視される。歴史に通じていたシラーの歌った長詩『芸術家』第363句以下では、東ローマ帝国の首都ビューザンティオンが、イスラム教国トルコに占領され陥落した1453年が重視され、この軍事政治上の大事件がイタリア・ルネサンスの要因となっている。しかもイスラム側を単に野蛮人として片付けた後シラーは、ギリシア語圏から直接に西方ラテン語圏へと文芸復興の聖火が伝来したと単刀直入に物語る。確かに文芸復興の盛期は、ラファエロたちが活躍した1500年頃なので、これに先立つ1453年の帝国解体は見逃せない。但し『芸術家』終結部でシラーが歌う根源の一者へと回帰する思想の源、つまり新プラトーン派の哲学へと西欧が開眼する点の方を重く見るならば事情は異なる。実際『アテーナイの学院』でラファエロが描いた思想界の双璧プラトーンとアリストテレースも、この新プラトーン主義において継承され、この筋を通して本格的に西欧入りしたと考えられるからである。まず次第にアリストテレースへと、イスラム哲学を介してラテン中世スコラ世界は親しむ。そして同じ経路で新プラトーン派の哲学も羅訳される。この時に野蛮人なのはスコラ学者の方で、この西欧の後進性はプラトーンが全訳される15世紀後半まで続くと見てよいであろう。だが1453年の帝都陥落よりも、この関連で重要なのは1439年フィレンツェ公会議の折に、西欧人が初めて本場ギリシア語圏の碩学たちの高度な議論に接した事実である。ところで東方ギリシア語圏より来訪した碩学にとり、自らの祖国ビューザンティオン側は敢えて文芸復興を拒否した正教会の勢力圏なので、もはや異国イタリア程に魅力ある精神風土でなかった。故に当の碩学達こそ、『芸術家』第367句で歌われた東方よりの美しき亡命者に相応しいと言える。

また同様の亡命者なら既に14世紀中葉に正教会により断罪され、その後ペトラルカにギリシア語を教えたバルラアムにも見い出され得る。確かに一応そうなる。しかしバルラアムの敵パラマースの側、つまり東方ギリシア正教会に継承された古典ギリシアの聖火の方が、実はヘルダーリンの至福なるギリシア（『パンと葡萄酒』第55句）の本質に繋がる。なぜなら正教徒パラマースが弁護し、その後ギリシア正教会の『聖山文書』(1340年－1341年) に認められた聖地アトースの神々しくも愚かな求道者ヘーシュカステース達に固有な否定神学、特にΑΙΣΘΗΣΙΣ ΠΝΕΥΜΑΤΙΚΗ（アイステースィス・プネウマティケー：霊感）とパラドクサ（ΠΑΡΑΔΟΞΑ：背理逆説）思考が、悲劇の誕生する至福なるギリシアでも生きてくるからである。この点シラーの『芸術家』に見られる楽天的な理想主義は、むしろ15世紀イタリア文芸復興期のフィチーノやピーコ達にも確かめられる肯定神学と通底しているのである。

VORBEMERKUNG

„Unsre rauhen Vorfahren in den thüringischen Wäldern mußten der Uebermacht der Franken unterliegen, um ihren Glauben anzunehmen. [...] (NA 17.368/369) [...] Die Hierarchie mußte in einem *Gregor* und *Innozenz* alle ihre Greuel auf das Menschengeschlecht ausleeren, damit das überhandnehmende Sittenverderbniß und des geistlichen Despotismus schreyendes Scandal einen unerschrockenen Augustinermönch auffordern konnte, das Zeichen zum Abfall zu geben, und dem römischen Hierarchen eine Hälfte Europens zu entreissen, — wenn wir uns als protestantische Christen hier versammeln sollten. [...] An grie- (NA 17.369/370) chischen und römischen Mustern mußte der niedergerückte Geist nordischer Barbaren sich aufrichten, und die Gelehrsamkeit einen Bund mit den Musen und Grazien schließen, wann sie einen Weg zu dem Herzen finden, und den Nahmen einer Menschenbilderin sich verdienen sollte.“ — so schreibt Schiller in seiner akademischen Antrittsrede „Was heißt und zu welchem Ende studiert man Universalgeschichte?“ am Tage 26. Mai 1789. Mitte März in demselben Jahre erscheint sein Riesengedicht „Die Künstler“ im von Wieland herausgegebenen „Teutschen Merkur“. In diesen „Künstlern“ geht es um „Hesperiens Gefilde“ (V.369), worauf die „verjüngten Blüthen Joniens“ (V.370) „hervorsproßten“ (V.369f.), nachdem „der schöne Flüchtling aus dem Osten“ (V.367) „den letzten Opferbrand“ (V.364) der Antike „dem Abendland brachte“ (V.366) . Im Zentrum seines Interesses steht wohl der türkische Sieg, den die islamischen „Barbarenheere“ (V.362) über die byzantinischen Christen im Jahre 1453 errungen haben. Aber als „schöne Flüchtlinge“ waren schon der platonische Plethon (1355-1452), der aristotelische Trapezontios (1395-1484), der synkretistische Argyropulos (1410-1490) u.a.m. bei den beiden Ökumenischen Konzilien nach Ferrara 1438 und nach Firenze 1439 „aus dem Osten“ gekommen. Dabei entzog sich die sachkundige Kontroverse der byzantinischen Gelehrten der Kenntnis der damaligen Abendländer. Kurz vor einem Jahrhundert debattierten der orthodoxe Palamas (ca.1296-1359) und der italienische Barlaam (ca.1290-1350) über die seelische Reinigung von Griechentum und Christentum in den Jahren 1337-1341. Schließlich wurde Barlaam verdammt, bekehrte sich zum Katholizismus und lehrte Petrarcha (1304-1374) und dergleichen Griechisch. Da

die griechische Orthodoxie auf diese Weise das Griechentum gering achte, mußten sich die oben erwähnten Platon- und Aristoteleskenner als „schöne Flüchtlinge“ fühlen. Nichtsdestoweniger können wir nicht vom antiken Erbe in der orthodoxen Verteidigungsschrift des Palamas absehen, weil dieser Kirchenvater kein Auge vom griechischen „Mysterium im vollen Licht“ wendet, das Hofmannsthal im Prosa „Griechenland“ (1922) zum Kern der Sache macht:„Dieses Lichts ΘΕΩΡΙΑ (Schau) ist ΕΝΩΣΙΣ(Einheit)“ (Palamas „Verteidigung der heiligen Hesychasten“ Teil II.3.6). Diese „ΕΝΩΣΙΣ(Einheit)“ durch das „Mysterium im vollen Licht“ gilt für die „mystische Einheit über den ΝΟΥΣ (Geist) auf der Suche nach dem (christlichen) Gott“ (PG 150.1228C) im „Buch des Heiligen Berges“ (1340-1341), das der heilige Palamas oder seinesgleichen schrieb und unter dem die griechischorthodoxen Mönche des heiligen Athos ihre Unterschrift setzten.

(1)「夕べの国へスペリアの野」(Hesperiens Gefilde)

今回 Friedrich シラー Schiller (1759年－1805年) が残した全481句に亘る長大な Gedankenlyrik (思想抒情詩)、つまり Lehrdichtung (教訓詩) の純化されたドイツ特有の詩歌『芸術家 (Die Künstler)』(1789年 Christoph Martin ヴィーラント Wieland 編『ドイツ・メルクール (Der Teutsche Merkur)』3月刊・283頁－302頁：Schillers Werke. Weimarer Nationalausgabe 1943ff. Bd.1. S. 201 - 214：NA 1. 201 - 214) に関して取り上げるのは、その第363句以下である。【Vertrieben von Barbarenheeren, (363/364) entrisset ihr den letzten Opferbrand (364/365) des Orients entheiligten Altären, (365/366) und brachtet ihn dem Abendland. (366/367) Da stieg der schöne Flüchtling aus dem Osten, (367/368) der junge Tag, im Westen neu empor, (368/369) und auf Hesperiens Gefilden sproßten (369/370) verjüngte Blüthen Joniens hervor.】(NA 1. 211)。まず一通り意味内容を辿ってみよう。第363句には、「野蛮人たちの軍勢により追い出され」【Vertrieben von Barbarenheeren,】とあり、次の第364句で二人称の複数により主語が示される。そこに君たちとあるのは、芸術家たちのことで、その第364句から第366句にかけ、「君たち (芸術家たち) が神に捧げられた最後の聖火を救い出し、(364/365)東方の汚れた祭壇より (救い出し)、(365/366) これを夕べの国西欧へともたらした」【entrisset ihr den letzten Opferbrand (364/365) des Orients entheiligten Altären, (365/366) und brachtet ihn dem Abendland.】と述べられている。ここで東方ギリシア語圏から西欧ラテン語圏に伝えられたとされるものは、勿論キリスト教ではない。それは言わばオリュムポスΟΛΥΜΠΟΣの聖火と言える古典古代の文化遺産に他ならない。そこで第367句以下で文芸復興ルネサンスが、高らかに歌われる。「その時、東方よりの美しき亡命者、(367/368)若き日が、西で新たに昇り、(368/369)夕べの国へスペリアの野に萌え、(369/370) 若返りしイオーニアーの (文化の) 花が (萌え) 出でた。」【Da stieg der schöne Flüchtling aus dem Osten, (367/ 368) der junge Tag, im Westen neu empor, (368/369) und auf Hesperiens Gefilden sproßten (369/ 370) verjüngte Blüthen Joniens hervor.】とあり、ここで夕べの国へスペリア (ギリシア語で夕方や宵の明星、あるいは冥界の神、いわゆる冥王星の冥王ハーデースΑΙΔΗΣを意味するヘスペロスΕΣΠΕΡΟΣに由来するラテン語 Hesperia ヘスペリア) とはラテン語イタ

リア Italia (イタリア語 Italia イターリア) のことである。つまり目下イタリア文芸復興 (フランス語 Renaissance ルネサンス：イタリア語 Rinascimento リナシメント) が念頭にあり、当然ドイツ文芸復興もこれに倣うことになる。先に第363句において Barbaren (野蛮人たち：梵語 बर्बराः バルバラーフ・ギリシア語BAPBAPOI バルバロイ：ラテン語 Barbari バルバリー) と言われたのは、1453年にビューザンティオンを陥落させ占領したイスラム教徒トルコ人と考えられる。そして『芸術家』でシラーの考える所では、この東ローマ帝国解体により、東方ギリシアの古典文化が、ビューザンティオンBYZANTION (別名コーンスタンティーヌー・ポリスKΩNΣTANTINOY ΠΟΛΙΣ、コーンスタンティーヌスの城塞都市ΠΟΛΙΣ ポリス：ラテン語コーンスタンティーノポリス Constantinopolis) で消滅し、西方ラテン世界で新たに復興したことになる。この際トルコ側は野蛮人として片付けられている。果たして文芸復興は、直接ギリシアから西欧ラテン世界が、影響を受けて始まったのであろうか？そうではない。実の所それは、イスラム文化圏を経由して、アリストテレースAPΙΣTOTEΛHΣ (前384年－前322年) など古代ギリシア文化没落期・前4世紀の文献が、まずイベリア半島経由でアラビア語からラテン語に訳される形で始まった。この紀元前4世紀を没落期とする目安は、古代ギリシアの諸ポリス (ΠΟΛΙΣ：城塞都市)、その主力はアッティケーATTIKH (ラテン語 Attica アッティカ) の首都アテーナイAΘHNAI (ラテン語 Athenae アテーナエ) と、オイディプース縁(ゆかり)の城塞都市ΘHBH テーベー (ラテン語 Thebe テーベー)、別名テーバイΘHBAI (ラテン語 Thebae テーバエ)、それらの連合軍がXAIPΩNEIA カイローネイア (首都がテーベーの国BOIΩTIA ボイオーティアーの村) 陸戦 (前338年) でマケドニアーMAKEΔONIA 軍に敗北し隷属した史実である。さて没落期・前4世紀のギリシア語文献であるが、勿論その中心はアリストテレースの自然学や形而上学であったから、この限りでは本来ルネサンス (文芸復興) において復興すべき文芸が、未だ本格的に取り扱われていない。だが少なくともスコラ哲学として13世紀には、この成果が纏められる。そして次の14世紀に当スコラ哲学に明るいダンテ Dante アリギエーリ Alighieri (1265年－1321年) が『神曲 (Divina Commedia)』(原題は『ギリシア語KΩMΩIΔIAコーモーディアー由来のラテン語 Comoedia コーモエディアを踏まえて Comedia コメーディア (喜劇)』1319年) を歌い上げることで、イタリア・ルネサンスは確固たる礎を得るに至る。絵画ではパドヴァ Padova 市のスクロヴェニ Scrovegni 礼拝堂などの壁画で名高いダンテの同時代人 Giotto ジョット Bondone (1266年頃－1337年)、抒情詩では通例『(脚韻) 詩歌集 (Rime：リーメ)』とか『歌謡 (カンツォーネ) 詩集 (Canzoniere：カンツォニエーレ)』とか呼ばれる『俗 (語イタリア語で歌われた) 事績の諸断片 (Rerum vulgarium fragmenta)』(決定稿・第9稿：1373年－1374年) の作者 Francesco ペトラルカ Petrarca (1304年－1374年)、散文家なら『十日 (物語)：デカメローネ (Decamerone)：ΔEKA デカ (数詞の10) HMEPΩN ヘーメローン (「昼・日」の意味の女性名詞 HMEPA ヘーメラーの複数属格)』(1353年) の Giovanni ボッカチョ Boccaccio (1313年－1375年) が、その話題の14世紀を飾っている。ダンテの『喜劇』を『神曲』と形容詞 divina を付して呼ぶ習慣は、彼を詩聖と仰いだボッカチョの1360年の『小論・ダンテ頌：Trattatello in laude di Dante』(通称『ダンテ伝：La vita di Dante』) 以来の伝統である。またダンテ自身は相当に不案

内であった古代ギリシア語（実はビューザンティオン陥落1453年頃までは古典古代より東ローマ Roma 文化圏内で連綿と使われ続けて来ていた言語）を、後述の南イタリア半島南部の州カラーブリア Calabria 生まれの博学なギリシア人バルラアムBAPΛAAM（1290年頃－1348年：50代の1342年から没年1348年までカラーブリア州南西のロークリ Locri 市のジェラーチェ Gerace 教会の司教）から教授を受ける14歳ほど年下の40歳頃のペトラルカ、その薫陶を受け継ぎ熱心に古代ギリシア語を学び、先輩ペトラルカ所蔵の古代ギリシア語原典プラトーン著作集の翻訳に励むことになる23歳ほど年下の30歳頃のボッカチョ、そうした知識欲旺盛な教養人たちが当14世紀イタリア文芸復興期に、その後の文芸復興リナシメント盛期15世紀の下準備をしている。

ところで話題の『芸術家』で文芸復興の要因とされるトルコの勝利1453年までは、ダンテの活躍した14世紀初期から百年以上も隔たっている。この点については、文芸復興を代表する人々の生没年に注目して見ると、大きく二つに分かれる。その前半は1300年前後で、その後半は1500年前後である。そうするとシラーの『芸術家』が念頭に置いているのは、むしろ後半のラファエロたちの時代と解かる。この点はヴァッケンローダー Wackenroder とティーク Tieck の共作1797年刊『芸術を愛する或る修道士の心情吐露』（Herzensergießungen eines kunstliebenden Klosterbruders. Stuttgart. Reclam 1969）を参考にすると、まず第一にあの神々しいラファエロ（der göttliche Raffael: S.9）であり、それにかくも高名なレオナルド（so hochgepriesener Leonardo: S.39）やあの偉大なミケランジェロ（der große Michelangelo: S.76）が続く。【[...] der göttliche Raffael [...] (S.9/S.39) [...] so hochgepriesener Leonardo [...] (S.39/S.76) [...] den großen *Michelangelo Buonarroti*, [...]】。確かに何と言っても、この1500年頃がイタリアにおける文芸復興リナシメントの最盛期に違いない。そこで『芸術家』においてシラーはこの時期に先立つビューザンティオン陥落の1453年を重要と考える。成程この軍事政治上の出来事は特筆に値する。しかしながら文芸復興そのものは、人目を牽く大事件により引き起こされたものと言うより、むしろ大事件をも含む時代全体の大きな流れから生じたと考えられる。従って、この場合トルコなどイスラム勢力を、決して野蛮人と見下すことは出来ない。すでに触れたように、そもそも文芸復興の始まりは巨視的に見れば、高度なイスラム文化に刺激された夕べの国ヘスペリア Hesperia の野蛮人、つまり日の沈む方角に住む西欧の人々が、新たな古来のギリシア文化遺産に心の目を開いた所にある。この古代文化の代表は誰より賢人達で、その姿はイタリアの首都ローマ市内のヴァティカン（市国）博物館 Moseo Vaticano にあるラファエロの名画『アテーナイの学院（la Scuola di Atene）』（1509年－1510年）に描かれている。その中心で天上のイデアーＩΔEA界を指すプラトーンΠΛATΩN（前427年－前347年）と大地（自然）を指すアリストテレースが対話しており、この両者の内プラトーンの方は明らかにレオナルドの姿を元にして描かれている。そして他方ミケランジェロの姿は、プラトーン達の前の方で深く物思いに耽っている所謂 Vorsokratiker（ソークラテース以前の思想家）として今日パルメニデースΠAPMEΝＩΔHΣ（前515年頃－前445年頃）と並び称されるヘーラクレイトスHPAKΛEＩTOΣ（前540年頃－前480年頃）に宿っている。ここで古代の思想家たちと、イタリアの芸術家二人を結んでいるのが、哲学・形而上学であるが、これをソークラテース以降の散文によるそれ、つまり抽象的な思弁の力で純粋な概念を縦横無尽に展開する

弁証法、具体的にはプラトーンの『国家』533C-D(Platons Werke auf der Textgrundlage der „Œuvres complètes: Collection Budé 1955-1974". Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1971-1981. Bd.4. S.612: Tome 7. Partie 1. p.174) でソークラテースが「TO THΣ ΨYXHΣ OMMA (魂の目) を上方へ導く」と説くH ΔIAΛEKTIKH MEΘOΔOΣ (弁証法) に限定しては片手落ちである。実際パルメニデースの残存する断片が詩として歌われたものであることからも類推がつく通り、やたら芸術の要素を殺ぎ落とした散文的な学問を唱導する意図は、シラーの『芸術家』(1789年) に皆無なのである。

そして彼も、後にFriedrichニーチェNietzsche (1844年－1900年) が『悲劇の誕生』(Die Geburt der Tragödie) で語る芸術家の形而上学 (Artisten-Metaphysik) を問題としていると言って良いであろう。即ちニーチェの場合は『悲劇の誕生』(初版1872年・再版1874年) 第3版 (1886年) に添えた「自己批評の試み」(Versuch einer Selbstkritik) その2で、在来の学問を芸術家の視点で見る (die Wissenschaft unter der Optik des Künstlers zu sehn) という形で、既成の学術体制に対決してゆく。【denn das Problem der Wissenschaft kann nicht auf dem Boden der Wissenschaft erkannt werden –, ein Buch vielleicht für Künstler [...] mit einer Artisten-Metaphysik im Hintergrunde, [...] (Fr. Nietzsches Werke. Kritische Gesamtausgabe. Berlin. Gruyter 1967ff. Abt.3. Bd.1. 1972. S.7/S.8) [...] – die Wissenschaft unter der Optik des Künstlers zu sehn, die Kunst aber unter der des Lebens....】(„Versuch einer Selbstkritik" 2)。これに対し、シラーは殊更に両者を睨み合わせるのでなく、むしろ哲学・形而上学・歴史学など学問が成熟すると芸術へと高まると理解する。このことを示すのが『芸術家』第402句以下 (NA 1.212) である。「思想家は積み上げた諸々の宝を、(402/403) 汝ら (芸術家) の腕の中で、始めて喜ぶ。(403/404) それは思想家の学問が、美へと円熟し、(404/405) 芸術作品へと高められ貴くされる時である」【Der Schätze, die der Denker aufgehäufet, (402/403) wird er in euren Armen erst sich freun, (403/404) wenn seine Wissenschaft, der Schönheit zugereifet, (404/405) zum Kunstwerk wird geadelt seyn】とある。この際シラーが自らの芸術作品を創作する時に、その土台としている学問は西欧18世紀の啓蒙の所産、なかんずく古代ギリシアを新たに見直した学術成果である。まず啓蒙の成果としては、芸術そのものを正当に評価する新たな学問、つまり美学 (Aesthetica) の誕生を忘れることができない。目下シラーが『芸術家』を歌うに際し、その筋の成果としてImmanuelカントKantの『判断力批判 (Kritik der Urtheilskraft)』(1790年) は未だ公刊されていない。だが既に美学史上画期的なAlexander Gottliebバウムガルテン Baumgarten (1714年－1762年) の学術書『美学』(Aesthetica) は1750年と1758年に公刊されており、ラテン語の著作ではあるが、それまでの知性本位の学風に偏らぬ方向、すなわち美意識に焦点をあてる探究姿勢が打ち出されている。その第1部・第1章・第1節・その14に、「感性的認識の完璧」(perfectio cognitionis sensitiuae) が「美学の目標」(Aesthetices finis) と明言されている通りである。【§.14. Aesthetices finis est perfectio cognitionis sensitiuae, qua talis, §.1.[...]】(„Aesthetica" 1750/1758. Faksimile-Nachdruck. Hildesheim. Olms 1986. Pars I. Cap.I. Sectio I. §.14. Pagina 6)。また彼の別論『詩歌に関する若干の点についての哲学的省察 (Meditationes philosophicae de

nonnullis ad poema pertinentibus)』(1735年) 第9節に拠れば、「完璧な感性的言説が詩歌である」(Oratio sensitiva perfecta est POEMA) と言うことになる。【§ IX. Oratio sensitiva perfecta est POEMA, [...] („Meditationes philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus / Philosophische Betrachtungen über einige Bedingungen des Gedichtes" Lateinisch/Deutsch. Hamburg. Felix Meiner 1983. S.10/S.11) § IX. Eine vollkommene sensitive Rede ist EIN GEDICHT. [...]】。因みに当論の4年後にバウムガルテンがラテン語で刊行した哲学書『形而上学 (Metaphysica)』(1739年) も、批判前期にカントが講義の基礎にして活用するほど重視した注目すべき書物である。そして当時ギリシアを考えるのに指針を与えた画期的な書、即ち Johann Joachim ヴィンケルマン Winckelmann の『ギリシア芸術作品模倣論 (Gedancken über die Nachahmung der Griechischen Wercke in der Mahlerey und Bildhauer-Kunst)』(1755年) であるが、確かにシラーの『芸術家』(1789年) の場合、彼の別の詩歌『幽魂の国 (Das Reich der Schatten)』(1795年・後1804年『理想と人生 (Das Ideal und das Leben)』と改題) 冒頭「永遠に清澄にして明鏡の如く… (Ewig klar und spiegelrein [...])」(第1句: NA 1.247) が目指しているような典雅沈静の美、ヴィンケルマンが『ギリシア芸術作品模倣論』の第88節で説いた edle Einfalt und stille Größe (高貴な純朴と静かな偉容) に協和する要素は希薄である。しかしながら同じ『ギリシア芸術作品模倣論』第178節にある「芸術家が運ぶ筆は Verstand (理知) に浸されているべきである」と言う Allegorie (寓意) 論の方は、『芸術家』との結び付きが深いと言える。なぜなら「思想家の学問が、美へと円熟し、(404/405) 芸術作品へと高められ貴くされる」(『芸術家』第404句－第405句) ことが関心の的だからである。【§.79. Das allgemeine vorzügliche Keñzeichen der griechischen Meisterstücke ist endlich eine edle Einfalt und eine stille Größe, sowohl in der Stellung als im Ausdruke. So wie die Tiefe des Meers allezeit ruhig bleibet, die Oberfläche mag (J. J. Winckelmann: Sämtliche Werke in 12 Bänden. Donauöschingen 1825-1829. Faksimile-Nachdruck. Osnabrück. Otto Zeller 1965. Bd.1. S.30/S.31) noch so wüthen, eben so zeiget der Ausdruk in den Figuren der Griechen bei allen Leidenschaften eine große und gesezte Seele. [...] (S.31//S.34) [...] §.88. Die edle Einfalt und stille Größe der griechischen Statuen ist zugleich das wahre Keñzeichen der griechischen Schriften aus den besten Zeiten, der Schriften aus Sokratis Schule; und diese Eigenschaften sind es, welche die vorzügliche Größe eines Raphaels machen, zu welcher er durch die Nachahmung der Alten gelanget ist. [...] (S.34//S.56) §.178. Der Pinsel, den der Künstler führet, soll in Verstand getunkt sein, wie jemand von dem Schreibegriffel des Aristoteles gesaget hat. Er soll mehr zu denken hinterlassen, als was er dem Auge gezeiget, und dieses wird der Künstler erhalten, weñ er seine Gedanken in Allegorien nicht zu verstecken, sondern einzukleiden gelernet hat.】(Winckelmann: Sämtliche Werke 1825-1829. Bd.1. S.30-31/S.34/S.56)。

他方イタリア人トーマース・アクイーナース Thomas Aquinas (1225年頃－1274年) が13世紀スコラ哲学の成果として1265年から1273年にかけて著わした『神学大全』(Summa theologica. Vollständige, ungekürzte deutsch-lateinische Ausgabe, übersetzt von Dominikanern und Benedik-

tinern Deutschlands und Österreichs. Summa theologica. Prima Pars 1934-1951) にも、別の意味で新たな学問の息吹きが通っている。それは大雑把に言うと、新プラトーン派の学統で、この下にアリストテレースの形而上学とプラトーンのイデアー論が融合していると見受けられる。例えばトーマースの『原因論 (Liber de Causis) に関する註解』(Super Librum de Causis Expositio. Texte établi et présenté par H.D. Saffrey. Fribourg. Sciété philosophique / Louvain. Éditions E. Nauwelaerts. 1954) が、このことを物語っている。その序文で初めに哲学者が言っているように (Sicut PHILOSOPHUS dicit) と出て来るのは【Sicut PHILOSOPHUS dicit in *X°Ethicorum* ultima felicitas hominis consistit in optima hominis operatione quae est supremae potentiae, scilicet intellectus, respectu optimi intelligibilis.】(Thomas Aquinas: Super Librum de Causis Expositio. Pagina 1)、当然アリストテレースで、その『ニーコマコス倫理学 (エーティカ・ニーコマケイア：HΘIKA NIKOMAXEIA)』第10巻・第7章 (Aistotelis Opera edidit Academica Regia Borussica. Aristoteles graece ex recognitione I. Bekkeri. 1831 in 5 voluminibus. Faksimile. Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1960. Volumen prius. 1177A. 12-18) 【[...] H EYΔAIMONIA KAT' APETHN ENEPΓEIA, [...] KATA THN KPATIΣTHN· AYTH [...] TOY APIΣTOY. [...] NOYΣ [...] ΠEPI KAΛΩN KAI ΘEIΩN [...] TΩN EN HMIN TO ΘEIOTATON, [...] H TEΛEIA EYΔAIMONIA. OTI Δ' EΣTI ΘEΩPHTIKH, EIPHTAI.】が踏まえられている。【Ist aber die Glückseligkeit eine der Tugend (Aretê) gemäße Tätigkeit (Energeïa), so muß dieselbe natürlich der vorzüglichsten Tugend gemäß sein, und das ist wieder die Tugend des Besten in uns. Mag das nun der Verstand (Nûs: Intellectus) oder etwas anderes sein, was da seiner Natur nach als das Herrschende und Leitende auftritt und das wesentlich Gute (Kalon) und Göttliche (Theïon) zu erkennen vermag, sei es selbst auch göttlich oder das Göttlichste (Theïotaton) in uns: – *immer wird seine seiner eigentümlichen Tugend gemäße Tätigkeit die vollendete* (teleïa) *Glückseligkeit* (Eudaïmonïa) *sein.* Daß diese Tätigkeit *theoretischer* oder *betrachtender* Art (Theôriâ) ist, haben wir bereits gesagt.】(Aristoteles: Philosophische Schriften in 6 Bänden. Hamburg. Felix Meiner 1995. Bd.3. „Nikomachische Ethik" Buch 10. Kap.7. S.248)。ここで「テレイアー・エウダイモニアー」(TEΛEIA EYΔAIMONIA) とあるのが、トーマースにより直訳されて究極の幸福 (ultima felicitas: ウルティマ・フェーリーキタース)、フランス語で言う «suprême félicité» として、更には一層キリスト教風に至福 (Beatitas: ベアーティタース) として取り上げられる。【Ce n'est plus moi qui te parle; je suis déja dans les bras de la mort. Quand tu verras cette Lettre, les vers rongeront le visage de ton amante, et son cœur où tu ne seras plus. Mais mon ame existeroit-elle sans toi, sans toi quelle félicité goûterois-je? Non, je ne te quitte pas, je vais t'attendre. La vertu qui nous sépara sur la terre, nous unira dans le séjour éternel. Je meurs dans cette douce attente. Trop heureuse d'acheter au prix de ma vie le droit de t'aimer toujours sans crime, et de te le dire encore une fois. [...] (Jean-Jacques Rousseau «Julie, ou la Nouvelle Héloïse» 1761. Sixième Partie. Lettre XII: Œuvres complètes. Bibliothèque de la Pléiade. Tome II. Gallimard 1964. p.743 // Tome I. 1959. p.1045) [...] Le flux et reflux de cette eau, son bruit continu

mais renflé par intervalles frappant sans relache mon oreille et mes yeux suppléoient aux mouvemens internes que le rêverie éteignoit en moi et suffisoient pour me faire sentir avec plaisir mon existence, sans prendre la peine de penser. [...] (Tome I. p.1045 / p.1046: J.-J. Rousseau «Les rêveries du proneneur solitaire» 1782. Cinquième promenade) [...] et le bonheur que mon cœur regrette n'est point composé d'instans fugitifs mais un état simple et permanent, qui n'a rien de vif en lui-même, mais dont la durée accroit le charme au point d'y trouver enfin la suprême félicité.】。そして「完璧に至福な人は、『福音書』の次の言葉により基礎づけられる」(homo perfecte beatus constituitur secundum illud Evangelii) とあり、『ヨハネ福音書』17・3で説かれていること、即ち「真正な唯一の神を知る」ことが第一 («Haec est vita aeterna ut cognoscant te Deum verum unum.») とされている。【secundum autem quod haec cognitio in nobis perficitur post hanc vitam, homo perfecte beatus constituitur secundum illud Evangelii: «Haec est vita aeterna ut cognoscant te Deum verum unum.»】(Thomas Aquinas: Super Librum de Causis Expositio. Pagina 2)。因みに1546年にトリエント宗教会議で決定されたローマ教会公認ウルガータ聖書 (Ev. Joh. 17.3) では、«Hæc est autem vita æterna: ut cognoscant te, solum Deum verum» (Patrologiae cursus completus. Paris. J.-P. Migne 1844-1866. Patrologia Latina 1844-1855/ 1864. Tom. 28 et 29. Versio Vulgata Hieronymi. Tomus 29. Col. 715) とか、«haec est autem vita aeterna ut cognoscant te solum verum Deum» (Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft 1969. Editio II 1975. Editio III 1983. Pagina 1689) となっている。かくして第一の学問は、神学としての形而上学となり、ここでそのギリシア語の古典、ビューザンティオン生まれの新プラトーン派プロクロスΠΡΟΚΛΟΣ (410年－485年) の『神学綱要：ΘΕΟΛΟΓΙΑ (テオロギアー：神学)のΣΤΟΙΧΕΙΩΣΙΣ (ストイケイオースィス：綱要)』(ΣΤΟΙΧΕΙΩΣΙΣ ΘΕΟΛΟΓΙΚΗ：ストイケイオースィス・テオロギケー) が言及される。【Et in graeco quidem invenitur sic traditus liber PROCLII PLATONICI, continens ccxi propositionies, qui intitulatur *Elementatio theologica*; in arabico [...]】(Thomas Aquinas: Super Librum de Causis Expositio. Pagina 3)。これは5世紀の書物である。更にトーマースは、アラビア語から翻訳された『原因論』を、前述のプロクロスの著者からの抜萃と看做し、その作者をイスラム教徒と考える。【[...] *Elementatio theologica*; in arabico vero invenitur hic liber qui apud Latinos *De causis* dicitur, quem constat de arabico esse translatum et in graeco penitus non haberi: unde videtur ab aliquo philosophorum arabum ex praedicto libro PROCLI excerptus, praesertim quia omnia quae in hoc libro continentur, multo plenius et diffusius continentur in illo.】(Thomas Aquinas: Super Librum de Causis Expositio. Pagina 3)。ところで専門家の説く所によれば、13世紀中葉トーマースの時代に『原因論』(Liber de Causis. Édition établie à l'aide de 90 manuscrits avec introduction et notes par Adriaan Pattin. Leuven・Louvain. Tijdschrift voor Filosofie 1966) は、『純粋な善 (アガトン：ΑΓΑΘΟΝ) についての註解に関するアリストテレースの書 (Liber Aristotelis de expositione Bonitas purae)』(Otto Bardenhewer: Die pseudo-aristotelische Schrift *Ueber das reine Gute* bekannt unter dem Namen *Liber de causis*. Freiburg im Breigau 1822. S.58-118 vom arabischen Text nebst deutscher Paraphrase und S.163-

191 vom lateinischen Text とか、M.-M. Anawati: Liber de causis. Traduction française inédite faite sur le texte arabe édité par Otto Bardenhewer, pro manuscripto. Université de Montréal. Institut d'Étude médiévales 1950参照) として権威づけられ、トーマースのいたパリ大学の授業科目に記載されていたようである。従って、トーマースの説くアラビア人を著者とする考えは当時の新説であるが、後の実証研究は新説に軍配を挙げ、スペインの都市トレード Toledo でアラビア語からラテン語に訳された点を確認している。それは12世紀のことである。ここで重要な点は、東方ギリシア語圏から直接に伝わらず、イスラム教徒のアラビア語圏から『原因論』(Liber de Causis) という新プラトーン主義の著書が西欧に、しかもスペイン経由でもたらされたことである。学識豊かなトーマースは、この書物に、もはや当時模範とされたアリストテレース哲学に収まり切らないものを認めたようである。それは分別知に基づく中世スコラ風の散文家アリストテレースよりは、むしろ文才豊かで気韻高き筆力を有し、しかも理知ロゴスΛΟΓΟΣを事とする分別知 Verstand が、不可解ゆえに避けて黙殺する神秘MYΣTHPIONミュステーリオンをも、敢えて神話ミュートスMYΘOΣとして語ろうと努めた達意の名文家プラトーンの学統を受け継ぐものと考えられる。つまりイスラム経由の『原因論』(Liber de Causis) により、古代末期3世紀の新プラトーン学派を代表する神秘思想家プローティーノスΠΛΩTINOΣ (204年－269年) により大成された、分別知に基づいたアリストテレース哲学に限定されない、深遠な伝統的プラトーン形而上学がスペイン経由で流れこんだのである。

興味深いことに、西方ラテン教会側では、一応マイスター Meister・エックハルト Eckhart (1260年頃－1328年頃) を1329年に異端として斥け、世界・宇宙 (コスモス：KOΣMOΣ)・万有 (パーン：ΠAN) が永遠とか、魂が創造などされなかったと説く新プラトーン主義の潮流に歯止めをかけ、出来ることなら異端の「雑草が、有害な萌芽へと成長する前に、その生え始めに窒息される」ように努めるが、これも一時的なことであり、それは先に言及した1300年前後ダンテの時代のことであった。【[...] omnes illae propositiones [...], quae postea, Echardo interim defuncto, in bulla Iohannis XXII condemnantur. [...] (p.290/p.291) [...] *Errores Echardi* [...] (p.291/p.292) [...] Item concedi potest mundum fuisse ab aeterno. [...] (p.291/p.292) [...] Homo nobilis est ille unigenitus Filius Dei, quem Pater aeternaliter genuit. [...] (p.292/p.293) [...] Aliquid est in anima, quod est increatum et increabile; si tota anima esset talis, esset increata et increabilis, et hoc est intellectus. [...]】(Enchiridion Symbolorum, Definitionum et Declarationum de rebus Fidei et Morum. Editio XXXVI. Friburgi Brisgoviae. Herder 1965. Paginae 290-295: ローマ法王の教書 In agro dominico·1329年3月27日)【BULLE JOHANNS XXII. »*In agro dominico*« *vom 27. März 1329, in welcher 28 Sätze Meister Eckeharts verdammt werden* Johannes, Bischof, Knecht der Knechte Gottes, zum ewigen Gedächtnis. Auf dem Acker des Herrn, dessen Hüter und Arbeiter Wir nach himmlischer Verfügung, wenn auch unverdientermaßen, sind, müssen Wir die geistliche Pflege so wachsam und besonnen ausüben, daß, wenn irgendwann ein Feind auf ihm über den Samen der Wahrheit Unkräuter sät, sie im Entstehen erstickt werden, bevor sie zu Schößlingen verderblichen Keimens aufwachsen, damit, nachdem der Same der Laster abgetötet und die Dornen der Irrtümer herausgerissen

sind, die Saat der katholischen Wahrheit fröhlich aufgehe. Fürwahr, mit Schmerz tun Wir kund, daß in dieser Zeit einer aus deutschen Landen, Eckehart mit Namen, [...]】(Meister Eckehart: Deutsche Predigten und Traktate hrsg. und übersetzt von Joseph Quint. München. Hanser 1963. S.449)。これに対し、シラーが『芸術家』で歌っているルネサンス最盛期、つまりビューザンティオン陥落の1453年より後の時代に至ると、プラトーンの学園アカデーメイアAKAΔHMEIAに倣った都市国家フィレンツェ Firenze のアカデーミア・プラトーニカ Accademia Platonica（創設1440年頃）において1462年以降その中心人物と成ったマルスィーリオ Marsilio・フィチーノ Ficino（1433年－1499年）の『(アカデーミア・プラトーニカにおける1469年の会食を舞台背景とした）恋エロースEPΩΣについて（との副題を持つ）プラトーンの「饗宴」への註解（In Convivium Platonis de Amore Commentarium)』(1469年）や『プラトーン神学（Theologia Platonica)』(執筆1469年－1474年：1482年刊)、それにシラーの『芸術家』には後述の変容メタモルポースィスMETAMOPΦΩΣIΣを回り関連するミランドラ Mirandola のピーコ Pico（1463年－1494年）の演説『人間の尊厳について（De Hominis Dignitate)』(1486年）などが現われ、ギリシア哲学とキリスト教との敵対関係を克服する試みが続く。そして他ならぬローマ法王庁の只中、今日のヴァティカン博物館に、ラファエロ Raffaello（1483年－1520年）が『アテーナイの学院（la Scuola di Atene)』(1509年－1510年）を描く16世紀は、この敵対関係を一層と有名無実にしたと考えられる。実際フィチーノがラテン語訳した古代ギリシア語文献を見てみると、1463年『ヘルメース文書：Corpus Hermeticum（Hermès Trismégiste. Collection Budé. Tome I. 1946 / Tome II. 1946 / Tome III. 1954. / Tome IV. 1954. Les Belles Lettres 1983)』(1471年刊)、1463年から1468年にかけプラトーン対話篇（1484年刊)、1484年から1492年にかけプローティーノスの『エネアデス：ENNEAΔEΣ：Enneades』(Plotini Opera. Ediderunt P. Henry et H.-R. Schwyzer. Paris. Desclée / Leiden. Brill. Tomus 1. Enneades I-III. 1951 / Tomus 2. Enneades IV-V. 1959 / Tomus 3. Enneades VI. 1973）の翻訳と註解（1492年刊)、1488年にプローティーノスの高弟で『プローティーノス伝』をも著したポルピュリオスΠΟΡΦΥΡΙΟΣ（232年頃－304年頃）の残存文献とプロクロスの『神学綱要』(ΠΡΟΚΛΟΥ ΔΙΑΔΟΧΟΥ ΣΤΟΙΧΕΙΩΣΙΣ ΘΕΟΛΟΓΙΚΗ. Edidit E.R. Dodds. Oxford. Clarendon 1933. Editio secunda 1963）等、1492年に『神秘神学：ΘΕΟΛΟΓΙΑ ΜΥΣΤΙΚΗ：テオロギアー・ミュスティケー』等のディオニュースィオスΔΙΟΝΥΣΙΟΣ文書(Patrologiae cursus completus. Patrologia Graeca. Paris. Migne 1857-1866. Tomus 3 et Tomus 4)、となる。このように大体15世紀後半に、プラトーン及び新プラトーン学派のプローティーノス、ポルピュリオス、プロクロスの作品、その他の重要な古代ギリシア語文献が、ラテン語で読めるようになった。その最後に述べたディオニューシオス文書の著者とされていたディオニュースィオス・アレオパギテースは、『新約聖書』の「使徒行伝」17･34に出てくる名前で、聖書の文脈上アテーナイ訪問時の使徒パウロ（ギリシア語パウロス：ΠΑΥΛΟΣ）の弟子と看做され、東西を問わずキリスト教圏で尊ばれた著作家であった。しかし本当は、この著作家が、500年前後プラトーン学派の影響を受けたシリアの修道士であると、今日では看做されている。【[...] Ο ΠΑΥΛΟΣ [...] (33/34) [...] ΔΙΟΝΥΣΙΟΣ Ο ΑΡΕΟΠΑΓΙΤΗΣ [...]】(Actvs Apostolorvm 17.33-34: Novum

Testamentum graece et latine edidit E. Nestle 1906. Editio decima. Stuttgart. Württembergische Bibelanstalt 1930. Pagina 355)【Sic Paulus exivit de medio eorum. Quidam vero viri adhærentes ei, crediderunt: in quibus et Dionysius Areopagita, et mulier nomine Damaris, et alii cum eis.】(Patrologia Latina. Migne. Tom. 29. Col.748: Liber Actuum Apostolorum. 17.33-34)。

(2)「東方よりの美しき亡命者」(Der schöne Flüchtling aus dem Osten)

以上の考察により、シラーがイタリア文芸復興リナシメントの要としているのは、プラトーン学派がまともに西方ラテン語圏で紹介された地点と解かる。実際シラーの『芸術家』最終詩節には、虹の比喩を巧みに織り込み、新プラトーン派の中心概念である一者（ギリシア語 EN ヘン：ドイツ語 Eins や Eines）に相当する根源の光の世界へと万物が回帰するプローティーノスの思想が美しく歌われている。「この上なく自由な母(天上の美神：ウーラニアー・アプロディーテー)の自由な息子達よ、(458/459) 飛翔せよ、厳粛な面立ちで、(459/460) die höchste Schöne (至高美) の輝く玉座へと、(460/461) 他の王冠には纏いつくな。(461/462: NA 1.213/214) 現世では (高邁な芸術家である) 汝らから消え失せた姉妹達に (462/463) 汝らが追いつくのは、母 (天上の美神：ウーラニアー・アプロディーテー) の懐においてである。(463/464) schöne Seelen (美しき魂たち) が美しいと感受したものが、(464/465) 卓越して完璧であるに違いない。(465/466) 果敢な雄飛なして高く (466/467) 汝らの時空を越え飛翔せよ。(467/468) 彼方には既に、汝ら芸術家の心を鏡として、(468/469) 来るべき世紀の曙光が白み始めているのだ。(469/470) 幾千にも絡み合い交錯し (470/471) 豊かで多彩な道また道を辿りて (471/472) 到来し、今や汝らは互いを腕(かいな)に抱き出迎えるのだ、(472/473) 崇高なる永遠の玉座の傍らにおいて。(473/474) あたかも七色の柔和な光線なして (474/475) 白色光が屈折するように、(475/476) あたかも七色の虹の光が (476/477) 白色光へと溶け入るように、(477/478) そのように幾千にも多様で明澄な彩り成しつ遊び戯れ、(478/479) 陶然とした眼指(まなざし)を囲み魔笛の如く、(479/480) かく滔々と唯一の真理の盟約の中へと、(480/481) ただ一条の光の中へと回帰するのだ!」【Der freysten Mutter freye Söhne (458/459) schwingt euch mit festem Angesicht (459/460) zum Strahlensitz der höchsten Schöne, (460/461) um andre Kronen buhlet nicht. (NA 1.213/214) Die Schwester, die euch hier verschwunden, (462/463) hohlt ihr im Schoos der Mutter ein; (463/464) was schöne Seelen schön empfunden (464/465) muß treflich und vollkommen seyn. (465/466) Erhebet euch mit kühnem Flügel (466/467) hoch über euren Zeitenlauf; (467/468) fern dämmre schon in euerm Spiegel (468/469) das kommende Jahrhundert auf. (469/470) Auf tausendfach verschlungnen Wegen (470/471) der reichen Mannigfaltigkeit (471/472) kommt dann umarmend euch entgegen (472/473) am Thron der hohen Einigkeit. (473/474) Wie sich in sieben milden Strahlen (474/475) der weisse Schimmer lieblich bricht, (475/476) wie sieben Regenbogenstrahlen (476/477) zerrinnen in das weiße Licht: (477/478) so spielt in tausendfacher Klarheit (478/479) bezaubernd um den trunknen Blick, (479/480) so fließt in Einen Bund der Wahrheit (480/481) in Einen Strohm des Lichts zurück!】(NA 1.213-214: „Die Künstler" V.458-481)。第460句に「die höchste Schöne (至

高美）の輝く玉座」とあることからも、何より関心の的はプラトーンの『饗宴（ΣΥΜΠΟΣΙΟΝ）』211D-Eで話題とされていること、即ち「かの美そのもの（＝美カロンΚΑΛΟΝ・自体アウトΑΥΤΟ：美のイデアーΙΔΕΑ）を見ること、エイリクリネス（ΕΙΛΙΚΡΙΝΕΣ純粋）で、カタロン（ΚΑΘΑΡΟΝ清浄）で、アミークトン（ΑΜΙΚΤΟΝ混じり気なき）（美自体を見ること）」にあると考えられる。【[...] ΑΥΤΟ ΤΟ ΚΑΛΟΝ ΙΔΕΙΝ ΕΙΛΙΚΡΙΝΕΣ, ΚΑΘΑΡΟΝ, ΑΜΙΚΤΟΝ, [...]】（Platons Werke auf der Textgrundlage der „Œuvres complètes: Collection Budé 1955-1974". Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1971-1981. Bd.3. S.350: Tome 4. Partie 2. p.71 / S. 351 nach Fr. Schleiermacher）【[...] jenes Schöne selbst rein, lauter und unvermischt zu sehen, [...]】。ここで哲学者プラトーンが理知本意の立場で暗に示す位階・秩序は、まず自然物理上の「（彫塑に見られる客観造詣の様に判然と識別される）エイリクリネス（ΕΙΛΙΚΡΙΝΕΣ純粋）な美そのもの」、次に倫理道徳上の「（心の浄化カタルスィスΚΑΘΑΡΣΙΣをもたらす）カタロン（ΚΑΘΑΡΟΝ清浄）な美そのもの」、そして最後に認識形而上学上の「（具象性を捨象して、そうした不純物なき、高度に抽象的な）アミークトン（ΑΜΙΚΤΟΝ混じり気なき）美」であろう。しかし実に文才豊かで自己矛盾をも孕んでいる詩人プラトーンの古来ホメーロス風と称えられる雄渾な筆致は、殊に修辞面でも見事な『饗宴』の場合、「ΤΟ ΤΗΣ ΨΥΧΗΣ ΟΜΜΑ（魂の目）を上方へ導く」と、プラトーンの『国家（ΠΟΛΙΤΕΙΑ）』533C-Dでソークラテースが説くΔΙΑΛΕΚΤΙΚΗ ΜΕΘΟΔΟΣ（ディアレクティケー・メトドス：弁証法）を枢軸とした純度の高い概念による推論や思弁の能力のみに囚われているとは言えないであろう。【[...] ΗΔΙΑΛΕΚΤΙΚΗ ΜΕΘΟΔΟΣ [...] ΤΟ ΤΗΣ ΨΥΧΗΣ ΟΜΜΑ [...] ΑΝΑΓΕΙ ΑΝΩ, [...]（Platons Werke. Bd.4. S.612: Tome 7. Partie 1. p. 174 / S.613 nach Fr. Schleiermacher）[...] Nun aber, sprach ich, geht die dialektische Methode allein auf diese Art, alle Voraussetzungen aufhebend, gerade zum Anfange selbst, damit dieser fest werde, und das in Wahrheit in barbarischem Schlamm vergrabene Auge der Seele zieht sie gelinde hervor und führt es aufwärts, wobei sie als Mitdienerinnen und Mitleiterinnen [...]】。

本来ここで問題のシラー作『芸術家』が誕生した啓蒙期18世紀西欧においては、既に触れた画期的なバウムガルテンのラテン語の著作『美学（Aesthetica）』（1750年・1758年）に確かめられ得るように、その関心がそれ迄の理知本位の所謂 Intellectualismus（主知主義：ギリシア語で言うヌースΝΟΥΣとか、ラテン語のインテレークトゥス Intellectus に当たる英知を第一とする思想）より離れ、むしろ感性の方へ焦点を当てることに時代は新機軸を見い出す。勿論この両者、理知と感性の相互浸透が、その基底でうねりつつ織り合わされながら流れていることは確かであるが、敢えて『芸術家』は伝統的な感性軽視に異議申し立てを為し、先に引用の第464句にあるように、「schöne Seelen（美しき魂たち）が美しいと感受したもの」（was schöne Seelen schön empfunden）を格別重視する。つまり Empfindung（感受性）や Gefühl（感情）の源 Sinn（感性：ラテン語 Sensus センススス：ギリシア語ΑΙΣΘΗΣΙΣ アイステースィス）の方が、ヌースΝΟΥΣとかインテレークトゥス Intellectus に呼応する Vernunft（理性：ラテン語 Ratio ラティオー）とか Verstand（知性・分別知）より強い関心の的となり、当然この結果アイステースィ

スΑΙΣΘΗΣΙΣの学問 Aesthetica (美学：アイステーティケーΑΙΣΘΗΤΙΚΗ) の誕生となる。そして前掲の『悲劇の誕生』におけるニーチェの言葉を援用すれば、シラーも『芸術家』で在来の学問を芸術家の視点で見る (die Wissenschaft unter der Optik des Künstlers zu sehn) という形で、既成の学術体制に対決してゆく。そこで先程話題の『芸術家』第358句－第481句との関連では、光明に満たされて一者 (ΕΝ：ヘン) へと回帰してゆく詩魂の浄化過程が、例の『国家』533C-DにおけるΔΙΑΛΕΚΤΙΚΗ ΜΕΘΟΔΟΣ (ディアレクティケー・メトドス：弁証法) のテオーリアー (ΘΕΩΡΙΑ 理論：ラテン語 Theoria テオーリア) ではなく、むしろ芸術家の美意識を介して表現されたテオーリアー (ΘΕΩΡΙΑ 直観：ラテン語 Intuitio イントゥィティオー) の方に認められるべきであろう。例えば、今日ヴァティカン博物館で鑑賞できるラファエロの名画『(『マタイ福音書』17・2で話題のターボールΘΑΒΩΡ 山頂における弟子達の前での) キリストの変容 (la Trasfigurazione de Cristo)』(1518年－1520年) に描かれた神々しい変容メタモルポースィスΜΕΤΑΜΟΡΦΩΣΙΣ (ラテン語 Metamorphosis メタモルポースィス：イタリア語 Metamorfosi メタモルフォズィ：ドイツ語 Metamorphose メタモルフォーゼ) が注目に値する。「イエスはペテロとヤコブとヨハネを … 彼らを導いて登る、ΟΡΟΣ (オロス：山) ΥΨΗΛΟΝ (頂) へと、ΚΑΤ' ΙΔΙΑΝ (自分達だけで)。そしてΜΕΤΕΜΟΡΦΩΘΗ (変容した)、彼らの前で、…」(Novum Testamentum graece et latine edidit E. Nestle. Editio prima 1906. Editio decima. Stuttgart. Württembergische Bibelanstalt 1930. Pagina 44)【Et post dies sex assumit Iesus Petrum, et Iacobum, et Ioannem fratrem eius, et ducit illos in montem excelsum seorsum: et transfiguratus est ante eos.】。古来の伝承で原典の山 (ΟΡΟΣ：オロス) は、「ターボールΘΑΒΩΡ 山」とされている。このターボール山を啓蒙期18世紀中葉に名声を馳せた詩人 Friedrich Gottlieb クロプシュトック Klopstock (1724年－1803年) が『救世主』(1748年－1773年) 第4歌 (初刊1751年) 第718句で高唱したことは、シラーにも周知のことであったろう。実際『シラーのシュトゥットガルト逃亡とマンハイム滞在・1782年から1785年まで』(執筆1828年・1830年：初刊1836年) で Andreas シュトライヒャー Streicher が、「詩人達の中では正にクロプシュトックがシラーの心を最も満足させた。それはシラーの心が、宗教の厳粛で崇高な諸対象の下に留まることを、なお依然として最も好んでいたからであった。」【Unter den Dichtern war es Klopstock, der sein Gefühl, das noch immer am liebsten bei den ernsten, erhabenen Gegenständen der Religion verweilte, am meisten befriedigte.】(Streicher: Schillers Flucht von Stuttgart und Aufenthalt in Mannheim von 1782 bis 1785. 1728/1730. Nach der ersten Ausgabe von 1836. Stuttgart. Reclam 1968. S.19) と述べていることからも、そのことは察せられ得る。

そこで『救世主』第4歌に注目すると、その第709句から第712句にかけて聖母マリアが讃えられた後、引き続く第713句から第720句にかけ、今度は例の変容メタモルポースィスΜΕΤΑΜΟΡΦΩΣΙΣの場である Tabor (ターボール山) を『救世主』では聖母マリアに擬え、特別視して際立たせる。「ユダヤ国の山岳全てを凌駕して Tabor (ΘΑΒΩΡ：ターボール山) は聳える。(713/714) 当山はキリストの Herrlichkeit (栄光) の証左。成程 (『マタイ福音書』21・5で、都市エルサレム全体を指す雅名として使われ呼びかけられている、都市東の古代ダヴィデが城砦を

築き、彼の墓もあるユダヤ人にとっては聖なる丘陵）Sion（ΣΙΩΝ：スィーオーン丘陵）もまた安らっている、(714/715) 甘美に、神の前で。確かに気高き救世主を受け入れたのは、(『マタイ福音書』26・36で、死を直前にしたイエスが一人孤独に祈った園ΓΕΘΣΗΜΑΝΙゲッセーマニーがその麓にあり、『使徒行伝』1・9－12によると、その山頂からイエスが天に取り上げられた｛ΑΝΑΛΗΜΦΘΕΙΣ：昇天した｝と伝えられる）Ölberg（橄欖（かんらん）ΟΡΟΣ山（オロス）：オリーブ林園：ΕΛΑΙΩΝエライオーン）で、(715/716) 幾度かイエスは苦悩して祈った。(『創世記』22・2で神が族長アブラハムに一人息子イサクをΟΛΟ｛ホロ：丸｝ΚΑΥΣΤΟΝ｛カウストン：焼き｝の犠牲獣さながらホロカルポースィス｛ΟΛΟΚΑΡΠΩΣΙΣ：燔祭（はんさい）：ラテン語 Holocaustum: フランス語 Holocauste ホロコースト｝に捧げよと命じたΟΡΟΣ山（オロス）、また『歴代史ΠΑΡΑΛΕΙΠΟΜΕΝΑ下』3・1に拠ると、『歴代史上』21・16でダヴィデに神が顕現した場所ゆえ、彼の息子ソロモンがΟΙΚΟΣ ΚΥΡΙΟΥ｛主の館：神殿｝を建て始めた）Moria（モーリヤーと原典ヘブライ語聖書で呼ばれている山）の峰は確かに担っている、(716/717) 高く神の至聖所を、そしてモーリヤー山は至聖所の下で戦いている。(717/718) だがユダヤ国の山岳全てを凌駕してTabor（ターボール山）は実に素晴らしく、(718/719) Tabor（ターボール山）は神の前にうち広げられ、崇高な Verklärung（変容：メタモルポースィスΜΕΤΑΜΟΡΦΩΣΙΣ）の証左。(719/720) そのようであった、聖なる婦人達の中でマリアは。」(Klopstock: Werke und Briefe. Historischkritische Ausgabe. Hamburger Klopstock-Ausgabe. Berlin. Gruyter 1974ff. Abteilung Werke IV. Bd.1. 1974. S.83-84 = HKAW IV.1.83/84)。【Ihre Begleiterinnen, die unter den Töchtern Judäa's (709/710) Zwo der liebenswürdigsten waren, und werth, von der Mutter (710/711) Ihres Propheten geliebt, und übertroffen zu werden, (711/712) Gingen neben Maria mit sanfter vertraulicher Demuth. (712/713) Wie vor allen Bergen Judäa's Tabor hervorragt, (713/714) Er der Zeuge der Herrlichkeit Jesus; zwar ruhet auch Sion (714/715) Lieblich vor Gott; zwar nahm den erhabnen Messias der Ölberg (715/716) Oft, wenn er rang in Gebet; zwar trägt die Stirne Moria's (716/717) Hoch das Allerheiligste Gottes, und zittert darunter: (717/718) Aber vor allen Bergen Judäa's ist Tabor doch herrlich, (718/719) Tabor, verbreitet vor Gott, ein Zeuge der hohen Verklärung. (719/720: HKAW IV.1.83/84) Also war unter den heiligen Frauen die hohe Maria.】。【ΣΙΩΝ [...] Sion】(Novum Testamentum graece et latine. Pagina 55: Matth. 21.5)。【Tunc venit Iesus cum illis in villam, quae dicitur Gethsemani, [...] ΕΙΣ ΧΩΡΙΟΝ ΛΕΓΟΜΕΝΟΝ ΓΕΘΣΗΜΑΝΙ, [...]】(Novum Testamentum graece et latine. Pagina 74: Matth. 26.36)【Et cum haec dixisset, videntibus illis, elevatus est: [...] (9//11) [...] hic Iesus, qui assumptus est a vobis in caelum, [...] (11/12) Tunc reversi sunt Ierosolymam a monte, qui vocatur Oliveti, qui est iuxta Ierusalem, sabbati habens iter. [...] ΕΠΗΡΘΗ, [...] (9//11) [...] ΟΥΤΟΣ Ο ΙΗΣΟΥΣ Ο ΑΝΑΛΗΜΦΘΕΙΣ ΑΦ' ΥΜΩΝ ΕΙΣ ΤΟΝ ΟΥΡΑΝΟΝ [...] (11/12) ΕΙΣ ΙΕΡΟΥΣΑΛΗΜ ΑΠΟ ΟΡΟΥΣ ΤΟΥ ΚΑΛΟΥΜΕΝΟΥ ΕΛΑΙΩΝΟΣ, [...]】(Novum Testamentum graece et latine. Pagina 74: Actvs Apost. 1.9//11-12)。【ΛΑΒΕ ΤΟΝ ΥΙΟΝ ΣΟΥ [...] ΤΟΝ ΙΣΑΑΚ, ΚΑΙ ΠΟΡΕΥΘΗΤΙ ΕΙΣ ΤΗΝ ΓΗΝ ΤΗΝ ΥΨΗΛΗΝ ΚΑΙ ΑΝΕΝΕΓΚΟΝ ΑΥΤΟΝ ΕΚΕΙ ΕΙΣ ΟΛΟΚΑΡΠΩΣΙΝ ΕΦ' ΕΝ ΤΩΝ

ΟΡΕΩΝ, ΩΝ ΑΝ ΣΟΙ ΕΙΠΩ】(Septuaginta. Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes edidit Alfred Rahlfs 1935. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft 1979. Vol.1. Pagina 29: Genesis 22.2) ：【[...] Deus [...] dixit ad eum: Abraham! Ille respondit: Adsum. (Genesis 22.1/2) Ait illi: tolle filium tuum unigenitum, quem diligis, Isaac et vade in terram Visionis, atque offer eum ibi in holocaustum super unum montium quem monstravero tibi. [...] Ubi nunc dicitur, *in terram Visionis*, in Hebrao habet, in *terram* המריה *Moria* ：[...]】(Patrologia Latina 28. Migne 1846. Tom.28. Versio Vulgata. Col.221: Biblia Hebraica Stuttgartensia. Deutsche Bibelgesellschaft 1967/1977/1984. Pagina 31)。【[...] ΤΟΝ ΟΙΚΟΝ ΚΥΡΙΟΥ [...] ΕΝ ΟΡΕΙ ΤΟΥ ΑΜΟΡΙΑ [...]】(Septuaginta 1935. Vol.1. Pagina 814)：【Et cœpit Salomon ædificare domum Domini in Jerusalem in monte Moria, qui demonstratus fuerat David patri ejus, [...]】(Patrologia Latina 28. Migne 1846. Tom.28. Versio Vulgata. Col.1432: Paralipomenon II. 3.1)。

当然キリスト教徒なら、ここで使徒パウロの『第ニコリント書簡』3・18を想い起こすであろう。「そして私達は皆、覆いなき顔で（直接面と向かって)、主（なる神）のドクサ｛ΔΟΞΑ：栄光：Gloria グローリア｝を自分の心眼に映し眺めつつ、(神の）エイコーン｛ΕΙΚΩΝ：似姿：Icon イーコーン｝そのもの（であるキリスト）へとメタモルプーメタ｛ΜΕΤΑΜΟΡΦΟΥΜΕΘΑ：私達は変容せられ：transformamur トラーンスフォールマームル｝、(神）のドクサ｛ΔΟΞΑ：栄光：Gloria グローリア｝から（神）のドクサ｛ΔΟΞΑ：栄光：Gloria グローリア｝へと（向かう)、正に主（なる神）の（聖なる）プネウマ｛ΠΝΕΥΜΑ：霊：Spiritus スピーリトゥス｝に拠っての様に。」【ΗΜΕΙΣ ΔΕ ΠΑΝΤΕΣ ΑΝΑΚΕΚΑΛΥΜΜΕΝΩΙ ΠΡΟΣΩΠΩΙ ΤΗΝ ΔΟΞΑΝ ΚΥΡΙΟΥ ΚΑΤΟΠΤΡΙΖΟΜΕΝΟΙ ΤΗΝ ΑΥΤΗΝ ΕΙΚΟΝΑ ΜΕΤΑΜΟΡΦΟΥΜΕΘΑ ΑΠΟ ΔΟΞΗΣ ΕΙΣ ΔΟΞΑΝ, ΚΑΘΑΠΕΡ ΑΠΟ ΚΥΡΙΟΥ ΠΝΕΥΜΑΤΟΣ.】(Novum Testamentum graece et latine. Pagina 462)【Nos vero omnes, revelata facie gloriam Domini speculantes, in eandem imaginem transformamur a claritate in claritatem, tamquam a Domini Spiritu.】。ラテン語で transformamur（トラーンス・フォールマームル）と訳されている原典のΜΕΤΑΜΟΡΦΟΥΜΕΘΑ（メタ・モルプーメタ）を、Martin ルター Luther（1483年－1546年）は「私達が Verklärung（変容)せらる」(wir werden verkleret) と訳している。【Nu aber schawen wir alle die klarheit des HErrn, wie in eim Spiegel, mit auffgedecktem angesichte, vnd wir werden verkleret in dasselbige Bilde, von einer klarheit zu der andern, als vom HErrn der der Geist ist.】(Werke. Kritische Gesamtausgabe. Weimarer Ausgabe 1883ff. Abt.III. Die deutsche Bibel. Bd.7. 1931. S.147: Aus der Bibel 1546. 2.Kor. 3.18)。このように新プラトーン派と『新訳聖書』の使徒との両者が、敵対することなく協和する次元を、フィレンツェのプラトーン礼讃者フィチーノ同様シラーも『芸術家』で目指しているようである。故に1453年以降をシラーは重んじたと思われる。しかし実際このような方向は、既に見た12世紀における『原因論』(Liber de Causis) の翻訳にも伺えるはずである。また更に、その源を辿れば、先にその名を挙げたディオニューシオス文書のラテン語訳や、それへの註解も留意される。これは既に9世紀のスコトゥス・エリウゲナ Scotus Eriugena の仕事として今なお残っているもの (PL = Patrologia Latina. Paris. Migne 1844-1864. Tomus 122)

を始めとして、他にも中世に三つある。つまりプラトーン学派の思想は西方ラテン教会そのものの伝承の中にも、更にはイスラム側のアラビア語圏から12世紀にスペイン経由で入ったものにもあり、トーマース・アクイーナースやマイスター・エックハルトは大いにこれらを活用したはずである。【PL 122. Col.125-266 : Joannis Scoti Expositiones super Ierarchiam Caelestiem Dionysii】【PL 122. Col.265-268 : Joannis Scoti Expositiones super Ierarchiam Ecclesiasticam Dionysii】【PL 122. Col.267-284 : Johannis Scoti Expositiones seu Glossae in Mysticam Theologiam Dionysii】【PL 122. Col.1029-1194 : Johannis Scoti Versio Operum Dionysii Areopagitae】【PL 122. Col.1035-1070 : Dionysii Areopagitae Liber primus de Caelesti Ierarchia】【PL 122. Col.1069-1112 : Dionysii Areopagitae Liber secundus de Ecclesiastica Ierarchia】【PL 122. Col.1111-1172 : Dionysii Areopagitae Liber tertius de Divinis Nominibus】【PL 122. Col. 1171-1194 : Dionysii Areopagitae Liber quartus de Mystica Theologia】。

但し、殊更に15世紀を重んじる『芸術家』におけるシラーにも一理ある。確かに、たとえラテン語訳にせよ、プラトーンやプローティーノスの著作全体に触れることは、この時に可能となった。しかしながら東方キリスト教圏の人々が、東ローマ帝国の首都ビューザンティオン陥落の1453年以降にわかに西欧へ押し寄せ、その結果フィチーノの訳業（上記1463年から1492年）が成ったと考えるのは性急である。むしろ重要な出来事は、その軍事・政治上の大事件の前にある。それは西方ラテン教会側（1431年７月23日開始スイス Basel バーゼル市・1438年１月８日再開イタリア Ferrara フェラーラ市・1439年２月26日再開イタリア Firenze フィレンツェ市）において開催された（東西）全（キリスト教）世界（教会合同）公会議（Concilium oecumenicum: コンキリウム・オエクメニクム）で、これを西方ローマ教会カトリックは、1439年２月26日以降のフィレンツェ会議のみを第17回公会議と看做している。【Conc. (oecum. XVII) FLORENTINUM: 26. Febr. 1439 [...] Hoc Concilium in Florentia urbe habitum unâ cum Conciliis Basileensi et Ferrariensi, [...] Haec conciliorum series inchoata erat Basileae (Basel) 23. Iul. 1431; [...] Ferrarae concilium coeptum est 8. Ian. 1438; post 16 sessiones concilium iterum translatum est, et quidem Florentiam, ubi 26. Febr. 1439 sessio I generalis celebrata est.】(Enchiridion Symbolorum, Definitionum et Declarationum de rebus Fidei et Morum. Editio XXXVI. Friburgi Brisgoviae. Herder 1965. Pagina 330)。この時1438年フェラーラへ、そして1439年フィレンツェへと、ビューザンティオン側から東方ギリシアの碩学が訪れた。この中で重要な人物としては、まずプラトーン学派プレートーンΠΛΗΘΩΝ（1355年頃－1452年）、次にアリストテレース学派トラペズーンティオスΤΡΑΠΕΖΟΥΝΤΙΟΣ（1395年－1484年）、そして両者の折衷学派アルギュロプーロスΑΡΓΥΡΟΠΟΥΛΟΣ（1410年－1490年）である。後にミランドラのピーコは第三の折衷学派を、フィチーノは第一のプラトーン学派を代表する。そしてシラーの『芸術家』（1789年）の背景として重要なのが、このうち折衷学派とプラトーン学派と考えられる。例えば前者ピーコは、演説『人間の尊厳について（De Hominis Dignitate)』（1486年）の中で、自分達折衷学派の立場を明白にこう主張している。「私達が第一に提示したのは、プラトーンとアリストテレースの concordia（協和・一致）で、これは多数により今迄信じられつつも、誰によっても十分証明されなかった

ことである。」【Proposuimus primo Platonis Aristotelisque concordiam a multis antehac creditam, a nemine satis probatam.】(Giovanni Pico della Mirandola: »De Hominis Dignitate«, »Heptaplus«, »De Ente et Uno«, et »Scritti Vari« a cura di Eugenio Garin. Firenze. Vallecchi 1942. p.144)。さて公会議の折に来訪した碩学プレートーン達は、自らの母国語ギリシア語で良く知っているプラトーン始めアリストテレースからプローティーノス、更にはプロクロス等、諸々のギリシア語圏の哲学者・思想家・形而上学者を自由自在に引用して、次元の高い議論を闘わせた。すると高々ラテン語訳で一部しか知らないイタリア人は、ただ拝聴するのみであったと想像される。そこで前述の15世紀後半におけるフィチーノのプラトーン訳が意味を持つことになる。それまでは部分訳であった。例えば15世紀前半のブルーニ Bruni (1369年－1444年) がラテン語に訳したプラトーン対話篇は6篇、即ち『パイドーン』と『饗宴』と『ゴルギアース』と『パイドロス』と『ソークラテースの弁明』と『クリトーン』に限られていた。因みにブルーニ訳の背景には、東方ギリシア語圏よりペトラルカの弟子によりフィレンツェへと招聘されたクリューソローラース ΧΡΥΣΟΛΩΡΑΣ (1350年頃－1415年) の影響があった。ここで再び当論の初めに引用されたシラーの『芸術家』第367句に着目してみよう。するとそこの東方よりの美しき亡命者 (der schöne Flüchtling aus dem Osten) を1453年以降に限定すると、只今見た東西教会合同会議の折1439年のフィレンツェにおける衝撃を見落とすことになる。確かに、この精神上の衝動があったからこそ、1462年以降フィチーノがその中心人物と成ったプラトーン学院 (Academia Platonica) がフィレンツェに創設される下地が整ったと言える。また別様に考え直せば、プレートーン達プラトーン学派こそ東方よりの美しき亡命者と看做され得る。なぜなら文芸復興によりプラトーン学派が尊重されるイタリアと比べると、当時ビューザンティオンはそれ程に古典古代礼讃者プレートーン達にとって魅力があったと思われないからである。この点に注目すると、その問題の中心は、東方ギリシア正教会が新たな文芸復興リナシメントに対して背を向けた点である。すでに11世紀にプラトーン主義者としてヨハネス・イタロス ΙΤΑΛΟΣ が弾劾され、この時から毎年復活祭前の四旬節における最初の主日、つまり第一週の日曜日が正教勝利の日として祝われることになった。更に14世紀における最終的な文芸復興との対決の結果、この論争において正教会が ΟΡΘΟΔΟΞΑ (オルトドクサ：正統教義) と認めた神学者グレーゴリオス・パラマース ΓΡΗΓΟΡΙΟΣ ΠΑΛΑΜΑΣ (1296年頃－1359年) には、四旬節第二週の主日である日曜日が捧げられ、パラマースはギリシア正教会の守護聖人とされ、今日でも格別尊ばれている。ところで、この聖別された護教家パラマースの対決相手は、ダンテ (1265年－1321年) やジョット (1266年頃－1337年) が活躍し始めた頃イタリア半島南部の州カラーブリア Calabria に生まれたギリシア人バルラアム BΑΡΛΑΑΜ (1290年頃－1348年) で、1330年頃ビューザンティオンに赴き、この東方ギリシア語圏でパラマースと論争 (1337年－1341年) する。この論争内容については後に詳しく検討するとして、取り敢えず敗れた論敵バルラアムについて関連事項を纏めておくと、この両者の論争の最後の年1341年にバルラアムは正教会で断罪され、結局その後イタリア帰還後1342年ローマ・カトリックに回宗し、50代を没年までカラーブリア州南西のロークリ Locri 市のジェラーチェ Gerace 教会の司教 (1342年－1348年) として過ごす。この晩年バルラアムが、14歳ほ

ど年下の40歳頃のペトラルカ（1304年－1374年）にギリシア語の手ほどきをする。但し弟子はプラトーンのギリシア語原典を入手したほど向学心はあったけれども、しかし古典語を十分読みこなせないまま他界してしまい、結局その薫陶を受け継ぎ熱心に古代ギリシア語を学び、先輩ペトラルカ所蔵の古代ギリシア語原典プラトーン著作集の翻訳に励むことになるのが、ペトラルカより９歳年下でバルラアム晩年に30歳代のボッカチョ（1313年－1375年）であった。先程プレートーン達による1439年のフィレンツェにおける衝撃に触れた。この時より約１世紀前（1337年－1341年）にバルラアムとパラマースの論争がある。従って、14世紀中葉に生を享けたプレートーンにとり、自分が生まれた頃にギリシア正教会が取った反バルラアム体制は苦々しいものであったに違いない。ところが彼がイタリアへ渡ってくると、皆が彼の古代ギリシア思想に関する博識に驚嘆し仰ぎ見るわけであるから、この西方ラテン語圏は恐らく彼にとり新天地と映じたことであろう。この意味でプレートーンこそ正に東方よりの美しき亡命者の筆頭であろう。

そこで東方ギリシア語圏の碩学達の中で、まずプラトーン学派プレートーンに眼を向けると、その生没年（1355年頃－1452年）に関しては、ミーニュ Migne 叢書『ギリシア教父著作集』（Patrologia Graeca）第160巻所収の『フランス語で認められた既知事実その２（Notitia altera Gallice adornata)』（Tom.160. Col.793-806）が、「ゲオールギオスΓΕΩΡΓΙΟΣ・ゲミストスΓΕΜΙΣΤΟΣは … 生まれた、ビューザンティオンで、 vers 1355（1355年頃に）」（793段－794段）と、更に「プレートーンΠΛΗΘΩΝは、… 故に彼の人生を entre 1450 et 1456（1450年から1456年の間に）終えたのであろう。ある匿名の註記は … 彼の死を au mois de juin 1452（1452年６月に）定めている。」（805段－806段）と記しているのを目安とすることが出来る。はじめの名ゲミストスも後の名プレートーンも共に「充溢」を意味するギリシア語であるが、この改名に関しては『既知事実その２』（799段－800段）に「古典古代に対する enthousiasme（感激・熱情）の中で彼は思い付いた、ゲミストスと言う名を捨て、プレートーンと言う名にすることを。」とある。当然プラトーンに近い後者プレートーンが、後の時代では彼の名として通用することになった。そして『既知事実その２』の中で注目に値する叙述は何より、彼が表向き公会議における教会の公務に勤しみながらも、心の中では古典古代に没頭していたことである。そして彼に帰せられる発言として『既知事実その２』（797段－798段）には、「やがて数年後唯一の宗教が至る所で教えられ、世界中で採用されるであろう。それはキリスト教でもイスラム教でもない、別の宗教で、古代ギリシア人達の宗教とそれ程違わない。」と言う文面が引用されている。しかも『既知事実その２』が力説する点は、この発言がプレートーンの味方プラトーン学派ではなく、彼の敵アリストテレース学派ゲオールギオスΓΕΩΡΓΙΟΣ・トラペズーンティオスΤΡΑΠΕΖΟΥΝΤΙΟΣ（1395年－1484年）に由来する事実である。【Singulier contraste de son rôle officiel avec ses sentiments personnels, s'il est vrai qu'à Florence même, pendant la durée de concile, il tenait le propos qu'on lui prête: «qu'avant peu d'annees une seule religion serait enseignée partout et universellement adoptée, religion qui ne serait ni celle du Christ, ni celle de Mahomet, mais une autre peu différente de celle des anciens Grecs» Ici ce n'est plus Gennadius, c'est un adversaire, et, il faut le dire, un violent ennemi, George de Trébizonde, qui lui attribue ce langage, attestant

l'avoir entendu lui-même: témoignage suspect, croyable pourtant, quand on le rapproche de l'extrême licence d'opinions qui régnait alors, et de tout ce que nous savons et saurons plus tard des idées religieuses de notre auteur. Avec une telle disposition d'esprit, on peut deviner comment il employa son séjour en Italie】。ここで話題の「古代ギリシア人達の宗教とそれ程違わない宗教」こそ、啓蒙期ヴィンケルマン著『ギリシア芸術作品模倣論』(1755年) を機に当時18世紀の教養人が抱いた古典古代の霊気に呼応するものと考えられ、当然これがシラーの『芸術家』(1789年) にも協和してゆく。

引き続き『既知事実その2』では、東西教会のフィレンツェ公会議 (1439年) をよそに、プラトーン学派プレートーンが次第にフィレンツェ共和国で歓迎され、この財源豊かな都市国家の文化人達に受け入れられてゆく様を描いている。「彼が解き明かしたプラトーン哲学、それは依然としてイタリア人達の耳には全く新しいものであった。」(il expliquait la philosophie de Platon, toute neuve encore pour les oreilles italiennes.) と記されているのに誇張はないであろう。当然その辿り着く先が『既知事実その2』の文面にもある通り、1462年以降プラトーン学院 (académie platonicienne) の中心人物と成る M. フィチーノ Ficino (1433年－1499年) であることに間違いはない。【Hors sa participation nécessaire aux travaux du concile et les conseils auxquels il était souvent appelé, nous croyons qu'il s'occupa beaucoup moins des affaires de son Eglise que du soin de sa propre réputation. Il était fort lancé dans la société des gens de lettres et des gens du monde, fort avant surtout dans la faveur de Cosme de Médicis (Tom.160. Col.798/Col.799) à qui il expliquait la philosophie de Platon, toute neuve encore pour les oreilles italiennes. Telle fut l'impression de ces entretiens, que Médicis, au rapport de Ficin, conçut dès lors le projet, plus tard réalisé, de son académie platonicienne. Enfin ce fut dans ce temps qu'à la demande de plusieurs personnes et probablement de Médicis lui-même, il composa son petit traité *sur les Différences entre les doctrines d'Aristote et celles de Platon*, premier signal de la controverse entre les deux écoles, et du mouvement qui devait ébranler d'abord et, deux siècle après, renverser la scolastique du moyen âge.】。以上の引用の最後に述べられている「2世紀後に、中世のスコラ (哲) 学を打倒する」(deux siècle après, renverser la scolastique du moyen age) と言う点は、17世紀 René デカルト Descartes (1596年－1650年) の『方法序説 (Discours de la méthode)』(1637年) 等に認められる近世哲学誕生のことを意味している。そこで話題のプレートーン著『アリストテレースの学説とプラトーンの学説との差異について』(sur les Différences entre les doctrines d'Aristote et celles de Platon)、ミーニュ Migne 叢書『ギリシア教父著作集』第160巻の希羅対訳 (Tom. 160. Col.889-934) では、『プラトーンとアリストテレースの哲学の差異について』(de Platonicae et Aristotelicæ Philosophiæ Differentia) とラテン語訳されている原著『アリストテレースがプラトーンと意見を異にする事柄について』(ΠΕΡΙ ΩΝ ΑΡΙΣΤΟΤΕΛΗΣ ΠΡΟΣ ΠΛΑΤΩΝΑ ΔΙΑΦΕΡΕΤΑΙ) であるが、これに関しては哲学史家 Johannes ヒルシュベルガー Hirschberger が、その『哲学史 (Geschichte der Philosophie)』(Bd.1. 1948. 12.Aufl. / Bd.2. 1952. 11.Aufl. Freiburg i.B. Herder 1980) 第2巻で以下の説明を施している。「プレートーンは全く古典古代に没頭し、

プラトーン主義の指導下でのギリシア宗教復興を夢見た。アリストテレースが（彼により）拒否された理由は、コスモス（ΚΟΣΜΟΣ：世界・宇宙）の永遠を説き、魂の個別人格上での不滅、及び神のプロノイア（ΠΡΟΝΟΙΑ：摂理）を否認しているからで、反対にプラトーンはエペケイナ（ΕΠΕΚΕΙΝΑ：彼岸）の世界、及び何より創造神デーミウールゴス（ΔΗΜΙΟΥΡΓΟΣ：コスモスの造物主）を識るとの旨である。この『アリストテレースとプラトーンの哲学の差異』について、プレートーンは自分の著作を物した。」【Plethon ging ganz in der Antike auf und träumte von einer Wiedererneuerung der griechischen Religion unter Führung des Platonismus. Aristoteles wurde abgelehnt, weil er die Ewigkeit der Welt lehre, die persönliche Unsterblichkeit der Seele leugne und die göttliche Vorsehung. Platon dagegen kenne eine jenseitige Welt und vor allem einen Schöpfergott. Über diesen „Unterschied der aristotelischen und platonischen Philosophie“ hatte Plethon eine eigene Schrift verfaßt.】（Hirschberger „Geschichte der Philosophie“ 11. Aufl. Bd.2. S.11）。

プレートーンが当著作で重視している中で、「コスモス（ΚΟΣΜΟΣ：世界・宇宙）の永遠」と「魂の個別人格上での不滅」と「神のプロノイア（ΠΡΟΝΟΙΑ：摂理）」に関しては、双方のうち専ら一方だけに固有な特長とすることは恐らく困難と考えられるが、しかし「エペケイナ（ΕΠΕΚΕΙΝΑ：彼岸）の世界」つまり現世から超越したイデアーΙΔΕΑ界と、「デーミウールゴス（ΔΗΜΙΟΥΡΓΟΣ：コスモスの造物主）」の二点は、プラトーン哲学の中心に据えられて然るべきであろう。そして東西を問わず全体キリスト教思想圏にとっても、この二点こそ実に興味深いプラトーン哲学の叡智と考えられる。例えば、シラーの『芸術家』にも顕著な、既成の現状から彼方へ超え出でて行くドイツ Idealismus 理想主義（イデアーΙΔΕΑ追求志向）においても、「エペケイナΕΠΕΚΕΙΝΑ・テースΤΗΣ・ウースィアースΟΥΣΙΑΣ（本質・存在の彼方）」（『国家』509B: Platons Werke. Bd.4. S.544: Collection Budé. Tome 7. Partie 1. p.139）への難問（ΑΠΟΡΙΑ：アポリアー）は意味深長であり、また『芸術家』公刊の翌1790年に印刷した論文『モーセの使命』でシラーが認める「真正な神デーミウールゴス（den wahren Gott, den Demiurgos）」（NA Bd.17. 1970. S.391）、『ティーマイオス』29AにおいてΚΑΛΟΚΑΓΑΘΙΑ（カロカガティアー：善美）の理想の下で「美しき（カロス：ΚΑΛΟΣ）… このコスモス（ΚΟΣΜΟΣ：宇宙・世界）」と対を成す「善き（アガトス：ΑΓΑΘΟΣ）デーミウールゴス（ΔΗΜΙΟΥΡΓΟΣ）」（Platons Werke. Bd.7. S.34: Collection Budé. Tome 10. p. 141）、即ち「エルガΕΡΓΑ（諸作品）のパテールΠΑΤΗΡ（父）、デーミウールゴスΔΗΜΙΟΥΡΓΟΣ（造物主）」（『ティーマイオス』41A：Platons Werke. Bd.7. S.64: Collection Budé. Tome 10. p.156）は、プラトーンの創造神として見逃せない。この両者に関しては『アリストテレースがプラトーンと意見を異にする事柄について』第1章の冒頭で既に言及され、ここでプレートーンはこう主張している。「さて一方プラトーンが、始源の神、万物の王者を、叡智的で如何なる場合も超越しているΟΥΣΙΑ（ウースィアー：本質・存在）のΔΗΜΙΟΥΡΓΟΣ（デーミウールゴス：創造神）、この本質・存在に起因する現世の全（世界・宇宙に相当する）ΟΥΡΑΝΟΣ（ウーラノス：天界）の創造神として据えているのに対し、他方アリストテレースはΔΗΜΙΟΥΡΓΟΣ（デーミウールゴス：創造神）を唯の一度たりとも、

その始源の神であると言っておらず、その代わり現世のΟΥΡΑΝΟΣ（ウーラノス：天界）のみが運動すると説いている。」【ΠΡΩΤΟΝ ΜΕΝ ΟΥΝ ΤΟΝ ΠΑΝΤΩΝ ΒΑΣΙΛΕΑ ΘΕΟΝ ΠΛΑΤΩΝ ΔΗΜΙΟΥΡΓΟΝ ΤΗΣ ΝΟΗΤΗΣ ΤΕ ΚΑΙ ΧΩΡΙΣΤΗΣ ΠΑΝΤΗ ΟΥΣΙΑΣ, ΚΑΙ ΔΙ' ΑΥΤΗΣ ΤΟΥ ΠΑΝΤΟΣ ΤΟΥΔΕ ΟΥΡΑΝΟΥ ΤΙΘΕΤΑΙ· ΑΡΙΣΤΟΤΕΛΗΣ ΔΕ ΔΗΜΙΟΥΡΓΟΝ ΜΕΝ ΟΥΔΕΝΟΣ ΟΥΔΑΜΟΥ ΑΥΤΟΝ ΦΗΣΙΝ ΕΙΝΑΙ, ΑΛΛΑ ΜΟΝΟΥ ΤΟΥ ΟΥΡΑΝΟΥ ΤΟΥΔΕ ΚΙΝΗΤΙΚΟΝ·】(Patrologia Graeca. Tom.160. Col.889)。このプラトーン学派の観点に対抗して、早速1455年アリストテレース学派トラペズーンティオスが反駁の書を提示する。その題名は「『プラトーンとアリストテレースの比較』(1455年)、この比較でアリストテレースが、プラトーンより多くの点で一層優れて（756段 /757段）いると contendit（彼は強硬に主張した)。… しかし反プラトーンの convicia（非難）と maledicentia（誹謗）で書が一杯なので、そこで当書を（かつてニーカイアΝΙΚΑΙΑの大主教で後にローマ教会の枢機卿になった）ベーサリオーンΒΗΣΣΑΡΙΩΝが perlegit（吟味し)、著者の temeritas（無思慮）に permotus（攪乱され)、著者の mens（精神）を exsecratus（呪い)、(1469年）トラペズーンティオスの名は出さずに、『プラトーンの calumniator（カルムニアートル：曲解者）に抗する』四書で応えた。まずプラトーンの知恵と教義を、次にプラトーン著作集と私達の聖書との類似を、それから美風良俗と清廉潔白な生涯を彼は説明している。更に著者の inscitia（無知）をより一層表明するため彼は第五書を追加し、この中でプラトーンの『ノモイ（ΝΟΜΟΙ：法律)』に関し著者トラペズーンティオス自身の解釈における errores（過誤）や lapsus（失錯）を彼は拾い上げ、反駁し、正した。」(ミーニュ叢書『ギリシア教父著作集』第161巻「トラペズーンティオス－既知事実」)【*Comparationem Platonis et Aristotelis*, qua Aristotelem Platone longo intervallo superiorem (Patrologia Graeca. Tom.161. Migne 1866. Col.756/Col.757) esse contendit, [...] Sed cum in Platonem conviciis ac maledicentia libri essent referti, ubi eos Bessarion perlegit, hominis temeritate permotus, et hominis mentem exsecratus, tacito Trapezuntii nomine in calumniatorem Platonis libris IV, respondit, quibus primum sapientiam Platonis atque doctrinam, mox scriptorium ejus cum nostris similitudinem, tum probitatem morum vitamque integerrimam exponit; et, ut inscitiam hominis magis ac magis propalaret, quantum addidit, in quo Trapezuntii in interpretatione legume Platonis semel atque iterum ab eodem edita, errores ac lapsus collegit, refutavit et emendavit, [...]】(Georgius Trapezuntius － Notitia)。

こんな風にして結局プラトーン哲学を主流とした古代ギリシア理解が定着してゆくのであるから、所詮イタリア文芸復興期15世紀以来関心の的は、例のラファエロの名画『アテーナイの学院 (la Scuola di Atene)』(1509年－1510年）の中央に場所を占めているプラトーン（前427年－前347年）とアリストテレース（前384年－前322年）に代表される哲学時代、既に述べた古代ギリシア文化没落期・前４世紀の文献であって、前述の『悲劇の誕生』第11章でニーチェが、「その Geburt der Tragödie（悲劇の誕生)、その密儀、そのピュータゴラースΠΥΤΑΓΟΡΑΣ（前570年頃誕生）やΗΡΑΚΛΕΙΤΟΣヘーラクレイトス（前535年頃－前475年頃）を伴った（前）sechstes Jahrhundert（６世紀)」(Kritische Gesamtausgabe. Abt.3. Bd.1. S.74）と述べて重視した

勃興し生育する時代の成果ではない。そして実は『アテーナイの学院』の前の方で、深く物思いに沈んでいる思想家ヘーラクレイトスの方が、後の時代19世紀の教養人ニーチェ（1844年－1900年）達の場合には際立つことに成るが、しかしシラーの『芸術家』（1789年）や当詩が踏まえるイタリア文芸復興期15世紀に関して言えば、こうした所謂ΣΩΚΡΑΤΗΣ ソークラテース（前470年頃－前399年）以前の豊かな断片類（Die Fragmente der Vorsokratiker. Griechisch und Deutsch von Hermann Diels. 初刊1903年、Walther Kranz 編、第６版、三巻本、 Zürich. Weidmann 社1951年－1952年刊）は、ほとんど視野に入っていないと見て良いであろう。しかしシラーがその断片類の一つを、自分の編集する文芸誌『(ギリシア語ΘΑΛΕΙΑ タレイア或いはΘΑΛΙΑ タリアーをラテン語で Thalia）タリーア（詩歌の女神ムーサ達の一人)』(1794年）に載せた後輩ヘルダーリン（1770年－1843年）の小説『ヒュペーリオン』第１巻（1797年）終結部を飾る第30書簡（所謂アテーナイ書簡）においては、既にヘーラクレイトスの断片51（Die Fragmente der Vorsokratiker. Bd. 1. S.162）が、プラトーンの『饗宴』187A(Platons Werke. Bd.3. S.258: Tome 4. Partie 2. p.25）を典拠にして浮上して来る。「ヘーラクレイトスの偉大な言葉、【ΕΑΥΤΩΙ（ヘアウトー：それ自体で）ΔΙΑΦΕΡΟΝ（ディアペロン：対立・分裂・抗争している）EN（ヘン：一者)】(EN ΔΙΑΦΕΡΟΝ ΕΑΥΤΩΙ：ヘン・ディアペロン・ヘアウトー)、これを言うことが出来たのは、ギリシア人だけだ。なぜなら、これが美の本質であり、これが見出される以前には、ΣΟΦΙΑ（ソピアー：知恵）をΦΙΛΟ（ピロ：愛でる）ΦΙΛΟΣΟΦΙΑ（ピロ・ソピアー：哲学）は存在しなかった。…(StA 3. 81/83) … だが理性が努力して求める美の理想、あの神々しい【それ自体で対立・分裂・抗争している一者】(EN ΔΙΑΦΕΡΟΝ ΕΑΥΤΩΙ：ヘン・ディアペロン・ヘアウトー）が輝けば、理性は盲目な要求をせず、何故に、何のために自ら要求するのかを知っているのだ。」【Das große Wort, das EN ΔΙΑΦΕΡΟΝ ΕΑΥΤΩΙ(das Eine in sich selber unterschiedne) des Heraklit, das konnte nur ein Grieche finden, denn es ist das Wesen der Schönheit, und ehe das gefunden war, gabs keine Philosophie. [...] (StA 3.81/83) [...] Leuchtet aber das göttliche EN ΔΙΑΦΕΡΟΝ ΕΑΥΤΩΙ , das Ideal der Schönheit der strebenden Vernunft, so fodert sie nicht blind, und weiß, warum, wozu sie fodert.】(Hölderlins Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe. Kohlhammer 1946-1985. Bd.3. S.81/S.83 = StA 3.81/83)。これはヘルダーリンの意見であり、丁度ギリシア悲劇のように緊張を内に孕んで「それ自体で対立・分裂・抗争している一者」に、Wesen der Schönheit（美の本質）や Ideal der Schönheit（美の理想）が認められている。

他方シラーは基本的に『芸術家』で、このような悲劇の誕生する観点を取っていない、と考えられる。むしろ当詩歌で詩人は、たとえ推論の理知以上に湧き迸る感性を尊ぶとしても、やはり前述の『国家（ΠΟΛΙΤΕΙΑ)』533C-Dでソークラテースが力説した点、即ち「TO THΣ ΨΥΧΗΣ OMMA（魂の目）を上方へ導く」と言う、言わば高き彼方を目指す上昇志向、つまり Veredlung（高貴化）に意欲を注いでいる、と見受けられる。これは当時18世紀にも折に触れ期待されたものであり、例えば、Friedrich Leopold シュトルベルク Stolberg（1750年－1819年）の『シラー氏の詩歌「ギリシアの神々」に関する意見（Gedanken über Herrn Schillers Gedicht: Die Götter Griechenlandes)』(『ドイツ・ムゼーウム』1788年８月・97頁－105頁：„Deutsches Mu-

seum" August 1788. S. 97 - 105) にも、確かめることが出来る。この『意見』は冒頭でプラトーンの説く「詩歌女神ムーサ達の狂気 (MANIA MOYΣΩN：マニアー・ムーソーン)」(『パイドロス』245 A ： Platons Werke. Bd.5. S.66) をも引き合いに出しながら、先の『芸術家』第464句「schöne Seelen (美しき魂たち) が美しいと感受したもの」(was schöne Seelen schön empfunden) を思わせる論調で、lebhafte Empfindungen (生き生きした感受性) を重視して、詩人シラーに期待する次のような要望を開陳している。即ち Begeisterung (霊感) により心魂の情念を高貴化する詩歌の精神は、他の情熱が眼指を曇らせるのに対し、むしろ心眼を明澄にし、哲学や形而上学の思弁よりも迅速で確実な直感で物の本質を見抜き、かつ他の情熱が嵌まり込む我執から解き放つ。そして話題の純粋な霊感から来る忘我が、我意を拡張する抜かりない分別の理知の対極にある。更に聴衆や読者が我執から自己を解放できなければ出来ないだけ、それだけ一層この解放感を味わうため詩人に期待する故、詩歌は神聖なものと成る。心魂を浄化し清めるカタルシスが、詩歌の霊感や情念と表裏一体と成っている。そしてシュトルベルクの心根は、複雑に錯綜する形而上の思弁に指導されるより、むしろ auf Flügeln des Dichters (想像の翼に乗り)、霊感が導く所へ運ばれたい、と言う所にある。【Ich habe von Kindheit an die Poesie mit Leidenschaft geliebt, denn lebhaft Empfinden schien mir immer der süßeste Genuß, dessen ein Mensch sich erfreuen kan. Ich hielt früh den Dichter, welcher lebhafte Empfindungen, die denjenigen, welchem er sie mittheilt, veredlen in andern erweckt, für ein wohlthätiges, für ein geflügeltes, heiliges Wesen, wie Platon sagt. Die Begeisterung ist eine Leidenschaft; aber es schien mir, daß sie sich von andern Leidenschaften durch einige sehr erhabne Vorżuge auszeichnete. Die andern verdunkeln unsern Blick; sie erhellt ihn. Im Schwindel der andern Leidenschaften schwinden die wahren Verhältnisse der Dinge vor unsern Augen dahin; sie entdeckt wahre Verhältnisse der Dinge, oft sichrer, allzeit schneller, als selbst die Philosophie. Andre Leidenschaften führen uns fast immer, vielleicht ohne Ausnahme immer, auch wenn sie am meisten scheinen uns von unserm Selbst zu entäußern, auf dieses zu parteiisch geliebte Selbst zurück; die Begeisterung entreißet, entzückt uns aus diesem Selbst, und was kan edler seyn, als diese Entäuserung, diese Entzückung? [S.97/S.98] Der Hörer, oder Leser, des Dichters hat, ohne daß er diese Gedanken entwickelt, vielleicht eine dunkle Empfindung von diesem Zustande, in welchem der Dichter seines Selbst entäußert wird; und da wir immer gern sehen, daß ein anderer sich vergesse, es desto lieber sehen, je weniger wir uns zu vergessen geneigt sind, so rechnet er vielleicht auch dieses Verdienst dem Dichter an, und diese Anrechnung ist wol eine der Ursachen, daß von jeher die Poesie als etwas sehr edles, als etwas heiliges angesehen worden. Man hat sich immer befugt gehalten, mit dem Philosophen zu rechten, ehe man sich von ihm durch die Labyrinthe seiner Untersuchungen leiten ließ; Auf Flügeln des Dichters uns tragen zu lassen, wohin ihn die Begeisterung auch führe, sind wir leicht geneigt.】。実際このシュトルベルクの『意見』の翌年、1789年 3 月に公刊されたシラーの『芸術家』も、このような要望に十分応え得る芸術作品の一つである。

普通プラトーン風と言えば、こうした高邁な上昇志向であり、イタリア文芸復興期15世紀のフィ

チーノ（1433年－1499年）やピーコ（1463年－1494年）に関しても事情は同じであろう。ここで『芸術家』を回り注目したいのは、既に言及した変容メタモルポースィスMETAMOPΦΩΣΙΣの点である。例えば『芸術家』第413句以下を見てみよう。「ますます広汎に諸々の思想と感情が（413/414）ひとしお豊かな調和の流れとなり（414/415）より満ちたSchönheit（美）の大河へと開かれる ― … 高貴なFormen（諸形式・諸形相）がそこで完成し、（418/419）一層と美しい謎が夜から立ち現われ、（419/420）いよいよ世界は豊かになり、… ますます芸術家の諸衝動は一層と高きを目指し、（423/424）いよいよ彼自身は小さくなり、彼の（プラトーン風の）エロース（EPΩΣ：止み難い高きを目指す衝動）は大きくなり、… 恒に一層と純粋なFormen（諸形式・諸形相）へと、一層と純粋な音調により（426/427: NA 1.212/213）恒に一層と高き高みを通り、そして恒に一層と麗しきSchöne（美）を貫き（427/428）詩歌の花の階（きざはし）は静かに立ち昇りゆく ―」【Je weiter sich Gedanken und Gefühle (413/414) dem üppigeren Harmonienspiele (414/415) dem reichern Strom der Schönheit aufgethan — (415/416) je schön're Glieder aus dem Weltenplan, (416/417) die jetzt verstümmelt seine Schöpfung schänden, (417/418) sieht er die hohen Formen dann vollenden, (418/419) je schönre Räthsel treten aus der Nacht, (419/420) je reicher wird die Welt, die er umschließet, (420/421) je breiter strömt das Meer mit dem er fließet, (421/422) je schwächer wird des Schicksals blinde Macht, (422/423) je höher streben seine Triebe, (423/424) je kleiner wird er selbst, je größer seine Liebe. (424/425) So führt ihn, in verborgnem Lauf, (425/426) durch immer reinre Formen, reinre Töne, (426/427) durch immer höh're Höhn und immer schön're Schöne (427/428) der Dichtung Blumenleiter still hinauf —】。ここで比較級を畳み重ねながら、シラーは巧みに芸術家の自己形成によるその魂の変容を、様々な角度から多彩に描いている。その過程で「ますます芸術家の諸衝動は一層と高きを目指し」(je höher streben seine Triebe)、「彼の（プラトーン風の）エロース（EPΩΣ：止み難い高きを目指す衝動）は大きくなり」(je größer seine Liebe)、と言うことになる。こうした次から次へと変容するFormtrieb（形成衝動）を念頭に置き、ピーコは演説『人間の尊厳について（De Hominis Dignitate)』(1486年）の中で、「誰が私達のXAMAΙΛEΩN（カメレオン）を驚嘆しないであろうか？或いは全体誰が他の何かを、それ以上に驚嘆するであろうか？あれは不当でなかったのだ、この私達のカメレオンをアテーナイ人アスクレーピオスAΣKΛHΠΙOΣが、転身し自ら自体をtransformans（変容させる）natura（自然・本性）を論拠に、密儀の中では（変化自在の神）プローテウスΠPΩ-TEYΣにより表現されると言ったことは。」と説いている。【Quis hunc nostrum chamaeleonta non admiretur? Aut omnino quis aliud quicquam admiretur magis? Quem non immerito Asclepius Atheniensis versipellis huius et se ipsam transformantis naturae argumento per Proteum in mysteriis significari dixit.】。(G. Pico: »De Hominis Dignitate«, »Heptaplus«, »De Ente et Uno«, et »Scritti Vari« p.106)。

ここで翻ってピーコ達の文芸復興と違い、プラトーン学派やアリストテレース学派など古典ギリシア関係に好意を示さない正統教義の方に眼を転じ、既に触れた護教家パラマースと、彼の論敵バルラアムの論争（1337年－1341年）を詳しく見てみよう。さて双方の論争を知るのに貴重な

文献が、パラマースの『三部作 (ΤΡΙΑΔΕΣ: Triades)』(1338年頃) で、正確な題名 (PG 150.779-780 = Patrologiae cursus completus. Paris. Migne 1844-1866. Patrologia Graeca 1857-1866. Tom. 150. Migne 1865. Col.779-780) は『聖なるΗΣΥΧΑΖΩΝ (ヘーシュカゾーン:静寂主義者ヘーシュカステースΗΣΥΧΑΣΤΗΣ) 達にΥΠΕΡ (関する弁護): ΥΠΕΡ ΤΩΝ ΙΕΡΩΣ ΗΣΥΧΑΖΟΝΤΩΝ (Pro iis, qui sacram quietem colunt)』(Grégoire Palamas: Défense des saints hésychastes. Grec / Français. Texte critique, traduction et notes par Jean Meyendorff. Leuven·Louvain. Spicilegium Sacrum Lovaniense. Fascicule 31. 1959. Seconde édition revue et corrigée 1973) である。因みに題名ではΗΣΥΧΑΖΩΝ (ヘーシュカゾーン) と言われているΗΣΥΧΑΣΤΗΣ (ヘーシュカステース) とは、直訳すれば「孤独なΗΣΥΧΙΑ (ヘーシュキアー:静寂) 主義者」で、これに関しては、580年頃から650年頃まで聖カタリーナΚΑΘΑΡΙΝΑ修道院長であったヨーハネースΙΩΑΝΝΗΣ・クリーマクスΚΛΙΜΑΞが、「ヘーシュカステースΗΣΥΧΑΣΤΗΣは、ΣΩΜΑ (ソーマ:肉体) ならざるものを、肉体の住いに宿さんと努め競い合う者であり、(このことは) ΠΑΡΑΔΟΞΟΝ (パラドクソン:背理逆説)。」(PG 88.1097B = Patrologia Graeca. Tom.88. Migne 1860. Col.1097B)【ΗΣΥΧΑΣΤΗΣ ΕΣΤΙΝ Ο ΤΟ ΑΣΩΜΑΤΟΝ ΕΝ ΣΩΜΑΤΙΚΩΙ ΟΙΚΩΙ ΠΕΡΙΟΡΙΖΕΙΝ ΦΙΛΟΝΕΙΚΩΝ, ΤΟ ΠΑΡΑΔΟΞΟΝ· [...] (PG 88.1097B/1098C) [...] Solitarius seu quietis et solitudinis studiosus is est qui naturam incorpoream corporis sui domicilio (quod sane paradoxum et rarum est) circumscribere et concludere conatur.】と、『ΠΑΡΑΔΕΙΣΟΣ (パラデイソス:楽園) の (ΚΛΙΜΑΞ (クリーマクス:梯子)』(Scala Paradisi) 第27段 (Gradus XXVII) で定義している。そして副題をパラマースの『三部作』の題名と同じ「ヘーシュカゾーンΗΣΥΧΑΖΩΝ (静寂主義者ヘーシュカステースΝΣΥΧΑΣΤΗΣ) 達にΥΠΕΡ (関する弁護) : ΥΠΕΡ ΤΩΝ ΙΕΡΩΣ ΗΣΥΧΑΖΟΝΤΩΝ」と題した『聖山文書 (ΑΓΙΟΡΕΙΤΙΚΟΣ ΤΟΜΟΣ : Hagioriticus Tomus)』(1340年−1341年) でパラマース擁護派 (PG 150.1228C) は、ヘーシュカステース達が、「神に向かい、ΗΣΥΧΙΑ (ヘーシュキアー:静寂) を通して、ΑΠΕΡΙΜΕΡΙΜΝΩΣ (アペリメリムノース:無心に無念無想で)、ΣΧΟΛΑΣΑΝΤΕΣ (スコラサンテス:専念し)、かつ純粋なΠΡΟΣΕΥΧΗ (プロセウケー:祈り) を通して、自分達を超えて (新たに甦り) 生れて、神の中で誕生し、神を目指すΜΥΣΤΙΚΗ(ミュスティケー:神秘的な)、ΝΟΥΣ (ヌース:叡知) を超えた (神秘的な) ΕΗΝΩΣΙΣ (ヘノースィス:合一) を通して、ΝΟΥΣ (ヌース:叡知) を超えた秘儀に入信した」と説いている。【ΕΑΥΤΟΙΣ ΓΑΡ, ΚΑΙ ΤΩΙ ΘΕΩΙ ΔΙ' ΗΣΥΧΙΑΣ ΑΠΕΡΙΜΕΡΙΜΝΩΣ ΣΧΟΛΑΣΑΝΤΕΣ, ΚΑΙ ΔΙΑ ΠΡΟΣΕΥΧΗΣ ΕΙΛΙΚΡΙΝΟΥΣ, ΥΠΕΡ ΕΑΥΤΟΥΣ ΓΕΝΟΜΕΝΟΙ, ΚΑΙ ΓΕΓΟΝΟΤΕΣ ΕΝ ΘΕΩΙ, ΔΙΑ ΤΗΣ ΠΡΟΣ ΑΥΤΟΝ ΜΥΣΤΙΚΗΣ ΥΠΕΡ ΝΟΥΝ ΕΝΩΣΕΩΣ, ΤΑ ΥΠΕΡ ΝΟΥΝ ΕΜΥΗΘΗΣΑΝ· (PG 150.1228C/1227C) alii quidem experientia edocti, quicunque rerum possessioni hominumque gloriæ et fœdis corporis voluptatibus ad amplectendam evangelicam vitam non solum renuntiaverunt, sed etiam hanc abrenuntiationem obedientia coataneis Christi confirmaverunt, sibi enim et Deo per quietem sine sollicitudine vacantes, et jugi oratione supra se ascendentes, et conjuncti Deo per mysticam et inintelligibilem cum eo unionem, quæ sunt supra mentem docti sunt】。

それでは次にパラマースの『三部作』(Triades) の内容を検討してみよう。例えば、いかにも正教会の護教家らしい発言が、『三部作』第二部（1・25）に見られる。「そして私は主張する。… 一方はピュスィカΦΥΣΙΚΑ（自然なもの）であり、… 他方はヒュペル・ピュアーΥΠΕΡΦΥΑ（自然を越えたもの）で、… そして私は後者を前者より優れていると看做し、また（『聖書』の聖）プネウマΠΝΕΥΜΑ（霊）の（息吹きが与える）知恵から霊感を受けた人々を、私はギリシア民族全体よりも優位に置く」(op.cit. p.275) とあり、古典ギリシア文化はキリスト教より劣ったものとされている。つまりパラマースは、あくまで『聖書』本位の考え方に徹しており、シラーが称えるギリシア文芸の復興に敵対している。これに対するバルラアムの反論は、『三部作』第二部（1・39）におけるパラマースの言葉で、このように尖鋭化されている。「このバルラアムはしかし、神々しい（聖）書のマテースィスΜΑΘΗΣΙΣ（学習・教育）が十全に魂をカタイレインΚΑΘΑΙΡΕΙΝ（浄める）のではなくて、むしろギリシアのマテーマΜΑΘΗΜΑ（見聞・学問）がそうすると主張する」(op.cit. p.305) とあり、パラマースの書き方によれば、一見した所バルラアムが『聖書』を軽視しているように取れる。恐らく本当の所バルラアムは、古代3世紀にキリスト教神学の基礎を築いたアレクサンドレイアの教父たちに似た考えだったのであろう。すなわち『聖書』の深い意味を解釈・表現するのに、古代ギリシアの学術・学芸はとても有効だという意見である。当然パラマースは、西欧16世紀の宗教界改革者ルターと同じく、こうした古代教父のギリシア礼讃を認めず、新たな文芸復興の動きを排斥した。そして正教会ビューザンティオン側では、論争で勝利の栄冠を与えられた前述の公文書『聖山文書』に霊峰アトースΑΘΩΣ山の修道僧たちが、1340年から翌年にかけ著名した。因みにアトース（ΑΘΩΣ）はギリシア北東マケドニアーに聳える高山であり、既に前5世紀ヘーロドトス（前484年－前430年以後）の『歴史』7・22で「メガΜΕΓΑ（大きな）ホロスΟΡΟΣ（山）でかつ名高く、海へ突き出て聳え、人も住んでいる。」(Herodoti Historiae. Bibliotheca Teubneriana. Stuttgart / Leipzig. Teubner Vol.1. 1987 / Vol.2. 1997. Vol.2. Pagina 182) と記され、既にウェルギリウスの『農耕詩』第1書の第332句では、落雷の良くある恐山として言及されている。【ipse pater media nimborum in nocte corusca (328/329) flumina molitur dextra: quo maxima motu (329/330) terra tremit; fugere ferae et mortalia corda (330/331) per gentes humilis stravit pavor; ille flagranti (331/332) aut Atho aut Rhodopen aut alta Ceraunia telo (332/ 333) deicit; ingeminant austri et densissimus imber, (333/334) nunc nemora ingenti vento, nunc litora plagunt.】(Vergil : Landleben = Bucolica · Georgica · Catalepton. Ediderunt J. et M. Götte. Tusculum-Bücherei. Lateinisch / Deutsch. München. Heimeran 1955. 4. verbesserte Aufl. 1979. S.80/S.81)【Juppiter selbst inmitten der Sturmnacht schleudert der Blitze (328/329) zuckenden Strahl mit der Rechten. Da bebt die gewaltige Erde, (329/330) zitternd flüchtet das Wild, die Herzen der sterblichen Menschen (330/331) rings auf der Welt drückt Schrecken zu Boden. Flammenden Blitzes (331/332) trifft er Athos und Rhodope, trifft Ceraunias Gipfel (332/333) felsenzertrümmernd. Sturm schwillt an, dicht prasselt der Regen, (333/334) bald erseufzt im Winde der Wald, bald dröhnt das Gestade.】。翻って『聖山文書』の内容を再度確認しておくと、パラマース派 (PG 150.1228C) は、ヘーシュカステース達が、「神

に向かい、静寂を通して、無心に無念無想で、専念し、かつ純粋な祈りを通して、自分達を超えて（新たに甦）生して、神の中で誕生し、神を目指す神秘的な、叡知を超えた（神秘的な）合一を通して、叡知を超えた秘儀に入信した」と説いており、「叡知を超えて神を目指すミュスティケーMYΣTIKHヘノースィスEHNΩΣIΣ（神秘的な合一）」が宗教の本質とされ、正に古典ギリシア精神のヌースNOYΣ（叡知）をも越える神秘が文脈上「純粋なプロセウケーΠPOΣEYXH（祈り）」（ΠPOΣEYXH EIΛIKPINHΣ）へと関連していた。さて『芸術家』に話題を戻すと、この純粋な祈りこそ、シラーが『芸術家』で唱導する文芸復興に欠けているものと思われる。この点ヘルダーリン Hölderlin が後に1800年から翌1801年にかけて歌う『パンと葡萄酒』(„Brod und Wein“ V.1-160: StA 2.90-95) となると事情が異なり、その第55句に出てくる至福なるギリシア (Seeliges Griechenland) は正に純粋な祈り（ΠPOΣEYXH EIΛIKPINHΣ：プロセウケー・エイリクリネース）の産物と評され得る。

ところが先輩シラーの場合は、未だ古典ギリシアの光明の世界が、それほど切実に詩人の骨肉となっていない、と見受けられる。それはともかくとして、果たして『悲劇の誕生』(1872年) 以来ギリシア文化の深層部を留意する今日、フィレンツェに衝撃を与えた教養人プレートーン達が体得していた古代ギリシア哲学の叡智は、詰まる所その表層の所謂アポローン風に徹した天神ゼウス達オリュムポス族の光明に過ぎないのではなかろうか。そうなると他方むしろ正統派パラマースが擁護した神々しくも愚かな静寂主義者ヘーシュカステースHΣYXAΣTHΣ達の方に、巨神プロメーテウスが運ぶと言える深層の聖火が受け継がれていた可能性が高くなる。すると『芸術家』第367句でシラーが歌った東方よりの美しき亡命者 (der schöne Flüchtling aus dem Osten) は、むしろ1453年ビューザンティオン陥落後と見る方が適切と思われる。なぜなら、プラトーン学派やアリストテレース学派の哲学以外の文献、殊に古代と中世の東方ギリシア教父の書物は、主に首都ビューザンティオン陥落後に西方ラテン世界へと運びこまれたと考えられるのであるから。とにかく最後に、ヘルダーリンの至福なるギリシアと純粋な祈りにおいて協和する光の神秘、例の紀行文『ギリシア』(1922年) で Hugo ホーフマンスタール Hofmannsthal (Gesammelte Werke in Einzelausgaben. Prosa I-IV. Frankfurt am Main. Fischer 1950-1955. Prosa IV. S.157) が語った充ち溢れる光の神秘 (Mysterium im vollen Licht) を、正教徒パラマースの『三部作』第二部（3・36）にも確かめておこう。ここ『三部作』では神の観想テオーリアーΘEΩPIAが、光の観想（TOY ΦΩTOΣ TOYTOY ΘEΩPIA）と語られ、光を観る（TO ΦΩΣ OPATAI）とか、光と成る（ΦΩΣ OΛON KAI AYTO ΓINEAI）ことが重視されている (Palamas: Défense des saints hésychastes. p.459 en grec)。【La contemplation de cette lumière est une union, bien qu'elle ne dure pas chez les imparfaits. Mais l'union avec la lumière est-elle autre chose qu'une vision? Et puisqu'elle s'accomplit avec l'arrêt de l'activité intellectuelle, comment s'accomplirait-elle, sinon par l'Esprit? Car c'est dans la lumière qu'apparaît la lumière et c'est dans une lumière semblable que se trouve la faculté visuelle; puisque cette faculté n'a d'autre moyen d'agir, ayant quitté tous les autres êtres, c'est qu'elle devient elle-même tout entière lumière et s'assimile à ce qu'elle voit; elle s'y unit sans mélange, étant lumière. Si elle se regarde elle-même, elle voit la lumière; si elle re-

garde l'objet de sa vision, c'est aussi de la lumière; et (p.458/p.460) si elle regarde le moyen qu'elle emploie pour voir, c'est là encore de la lumière; c'est cela l'union: que tout cela soit un, de sorte que celui qui voit n'en puisse distinguer ni le moyen, ni le but, ni l'essence, mais qu'il ait seulement conscience d'être lumière et de voir une lumière distincte de toute créature.】(Palamas: Défense des saints hésychastes. p.460/p.459)【... ΚΑΙ ΕΚΕΙΝΟ ΦΩΣ ΕΣΤΙ, ΚΑΙ ΤΟΥΤ' ΕΣΤΙΝ (op.cit. p.459 / p.461) Η ΕΝΩΣΙΣ, ΕΝ ΠΑΝΤ' ΕΚΕΙΝΑ ΕΙΝΑΙ ...】。こうした imitatio Christi（神キリストに似た者となる道）として、格別に「清らな心」が求められる。当然この典拠は「至福だ、ΚΑΡΔΙΑ（カルディアー：心）の清らな者達は。彼らは神を観るであろう故。」(Novum Testamentum graece et latine. Pagina 9) と説かれている『マタイ福音書』5・8（キリストの「山上の垂訓」その6）であるが、そもそも神を見ることの出来る可能性は、前述の変容メタモルポースィスΜΕΤΑΜΟΡΦΩΣΙΣで話題のΟΡΟΣ（オロス：山）ΥΨΗΛΟΝ（頂）、即ちΘΑΒΩΡ（ターボール山）に懸かっている。なぜなら使徒達が変容したキリストの神光をそこでΕΙΔΟΝ（エイドン：見た）と、少なくとも正統派パラマース達は理解しているからである。【C'est ainsi que les disciples choisis, [...], virent au Thabor la beauté essentielle et éternelle de Dieu, non pas la gloire que Dieu retire des créatures, selon ta basse con- (p.710/p.711) [...] ΤΗΝ ΟΥΣΙΩΔΗ ΤΟΥ ΘΕΟΥ ΚΑΙ ΑΙΔΙΟΝ ΕΥΠΡΕΠΕΙΑΝ ΕΙΔΟΝ ΕΝ ΘΑΒΩΡ, [...], ΑΥΤΗΝ ΤΗΝ ΥΠΕΡΦΩΤΟΝ ΤΟΥ ΑΡΧΕΤΥΠΟΥ ΚΑΛΛΟΥΣ ΛΑΜΠΡΟΤΗΤΑ, ΑΥΤΟ ΤΟ ΑΝΕΙΔΕΟΝ ΕΙΔΟΣ ΤΗΣ ΘΕΙΚΗΣ ΩΡΑΙΟΤΗΤΟΣ, [...] (p.711/p.712) ception, mais l'éclat supralumineux lui-même de la Beauté de l'Archétype, l'invisible vision elle-même de la parure divine, [...]】(Palamas: Défense des saints hésychastes. III.3.9)。

【Jinbun-kagaku-kenkyû 2003 : Geisteswissenschaftliche Studien der Philosophischen Fakultät der Universität Kôchi (=Kôtzschi) im Jahre 2003. Band 10 herausgegeben von der geisteswissenschaftlichen Abteilung der Philosophischen Fakultät der Universität Kôchi (=Kôtzschi) : Études des sciences humaines de la Faculté des Lettres de l'Université de Kôtchi en l'an 2003. Tome X édité par la section des sciences humaines de la Faculté des Lettres de l'Université de Kôtchi : Kôchi-daigaku. Jinbun-gakubu. Ningenbunka-gakka. Editio die I Julii anno MMIII】